女性と民間傳承

始

柳田國男先生著作集　第七册

女性と民間傳承

實業之日本社

左右両頁露光量調整、重複撮影

380
1a

帝國圖書館藏書

題簽

折口

國會圖書館
24.12. 7

·143959

目次

序言……一
誠心院の大きな石塔……一
四十餘りの尼姿……五
一遍上人と幽靈……九
まぼろしと夢の告……一三
靈驗は靈夢から……一五
深山と美しい上蔦……一八
美女の木の由來……二三
山に登らんとする式部……二五
勅撰集中の傳說……二八

左右両頁露光量調整、重複撮影

380
1a

題簽

折口

國會圖書館
24.12.7
寄贈

·143959

目次

序言……一
誠心院の大きな石塔……一二
四十餘りの尼姿……一五
一遍上人と幽靈……一九
まぼろしと夢の告……二三
靈驗は靈夢から……二五
深山と美しい上蔦……二八
美女の木の由來……三三
山に登らんとする式部……三五
勅撰集中の傳說……三八

目次

歌のにせもの……四三
書寫山の和泉式部……四六
南無藥師の歌……四九
或は小野小町とも……五二
歌と信仰……五六
旅の歌うたひ……五九
熊野比丘尼……六三
淨瑠璃の根原……六六
遊行女婦……七〇
小野のお通……七三
文ひろげの狂女……七七
話の泉……八一

誓願寺の緣起……八四
法然上人との因緣……八八
小式部の內侍……九二
母と子と歌……九六
木遣節と御伽草子……一〇〇
道命阿闍梨……一〇四
神童發見譚……一〇八
ウルカ問答……一一三
綿を賣りあるく人……一一六
樹に登る子供……一二〇
西行戻りの故跡……一二四
謎のやうな言葉……一二八

江口と室積と……一三二
旅僧と遊君……一三七
歌舞の菩薩……一四二
子を尋ぬる物狂ひ……一四五
天王寺の弱法師……一四九
烏帽子の力……一五三
百萬と山姥……一五七
萬四といふ女性……一六一
姥が池と念佛水……一六五
平左湯うはなりの湯……一六八
關の姥さま……一七二
河臨祭……一七六

姥と弘法大師……一八〇
太子講の根原……一八四
一つ家の姥……一八八
石の枕……一九二
越中立山の姥石……一九六
備後の和泉式部……二〇〇
歌占人……二〇四
古歌の濫用……二〇八
伊勢の三郎……二一二
曲舞と親子……二一六
白髪水……二一九
折居の松……二二三

印刷不良資料

目次

笠置山……二二七
東平王……二三一
松下氏……二三五
女の社會の成長……二三九
文藝の主管者……二四三
刀自の職業……二五〇
酒の歴史……二五四
索引……二五九
註……二七七

再刊序

和泉式部の足袋と題する一篇の文を、『桃太郎の誕生』の中に掲げて居る。あれはこの『女性と民間傳承』よりも後に成つたもので、自分には特に發見の興味が深く、又讀者にも二つを合せて讀んでもらひたかつたのだが、殘念なことには是が久しい間、絶版同樣の形になつて打棄てゝあつた。今度改めてそれを世に遺す折を得たからには、何としてなりとも之をほゞ完全に近い形に書き改めなければならぬのであるが、その時間がもう得られぬのみならず、當人もすでに失念してしまつて、集めることが出來ぬほどに、其頃の資料が

散亂して居る。もと〳〵非常に廣汎な問題の入口であつて、私はたゞ行く手を指ざしたに過ぎぬのだから、なまじいぢくりまはして印象の淡いものにするよりも、むしろ最初の意氣込を其まゝに、そつとして置くのがよいかとも思つて見た。昔は和泉式部の傳說を、この樣に色濃く美しく、描き上げるやうな技能と熱情が女性の中に在つた。世が改まればそれを又學問の一つの光、一つの力に變形することも可能なのではあるまいか。出來るものならば長生をして、自分もその實驗に參加して見たい。さういふ意圖の爲に、わざとでは無いけれども、この缺點の多かりさうな論文を、此まゝ殘して置く恥かしさを、忍ぶことにしたのである。

最初にこの文を公けにした婦女新聞といふのは、福島君といふ人が獨力で經營した週刊であつた。萬に近い讀者は悉く實際家であつて、斯んな物ずきなたつた一つの話題が、どうして六十回以上も連載せられたかを訝かるより外には、今はもう何の印象も持つて居ないことゝ思はれる。筆者が自ら薦めることを敢てしなかつたならば、切なる一つの志は空間に消えてしまふかも知れない。その方が私には一段と忍び難かつたのである。

昭和二十三年九月

柳田國男

序言

二三の外國に於ては、この學問は次第々々に、女流の管轄に移らうとして居ます。例へばミスコックスのシンドレラ、即ち日本で謂ふ紅皿缺皿物語の研究などは、もう三十年前の出版ですが、東西の諸民族の中から、二百八十幾つの同系統の昔話を集め、比較に由つて古い心持を尋ねて見ようとしたもので、今日になつてもまだどこの國にも、此より優れた本は出て居ないのです。希臘文化の新らしい考察としては、ミスハリソンのプロレゴメナ其他の著述が、大なる信用を持つて居ます。私の小さい書庫にも、まだそんな書物なら幾つかあります。

女性が我々を助け敎へ又慰める事業としては、是などは相當に價値の高いものゝ一つで、其成績に至つては男女の間に差が無いと言ふよりも、寧ろ婦人の方が一層容易且つ滿足に、目的を達することを得るかと思ひます。理由は色々ありますけれども、先づ第一に民族の歷史と云ふものは、實際の政治論などに應用し得る部分を除くの外、世に出て働かうとする者の準備として、通例稍迂遠な知識の如く考へられて居ます。人は多く久しい以前から知れて居る歷史を以て全部と心得、單に其暗記のみをして、もう歷史の敎育は濟んだやうに思つて居ます。其結果は之を學問と名づけることが不適當なほど、いつの時代にも問題が貧弱で、研究の興味が一般的で無いのです。

ところが從來の書物などで、明かになつて居る事蹟は、實は歷史の甚だ小さな一部分で、我々普通人の過去生活は、殆とまだ何一つとして知られて居ないのです。如何なる人にも次々に親の親があつて此國に住み、如何に平凡幸福な者でも、一生の間には樣々の悲しみ喜びの大事件があつた筈なのに、それが果して如何なる方法を盡しても、到底今ではわかる見込の無いものであるか否かと云ふことすら、まだ考へて見ようとする人が無かつたのです。天文學では肉眼で見えぬ糠星までが名を附けられ、細菌學では蚤の腹に住む生物の姿さへ明瞭になりました。差當りの必要の無いと云ふことは、決して學問を馬鹿にした理由では無かつたので、全く史學が餘りに古く且つ大切な學問であつた爲に、却つて之に對して無暗に不滿足の感じを表はすことを、幾分か我々が遠慮して居たのです。今に誰かゞそれを考へてくれると思つて、忙しい男たちがつひ辛抱して居たのです。

我々普通人の祖先の事蹟などは、判明したところが何れ有りふれた、見じめ

な氣の毒なものに相違ない。一々尋ねて見るのもつまらぬと、思ふ人が無いとは言はれませぬが、さう云ふ氣持も亦何から起つたかと考へると、やはり此國の人が妙に思切りよく、只先へ〳〵と渡つて行く傾きが、最初から在つたか又は後に始まつたかと云ふ、根本の問題に歸著します。それだけで無く全體に、今の所謂歴史にも尙問題は充ち滿ちて居ます。さうして現在の社會で是非とも解決をせねばならぬ事件の、根底に横たはつて居るのです。靜かに且つ同情を以て世相を觀察し得る者で無いと、之に向つて適當な疑問を抱くことさへも出來ぬのであります。

なるたけ理窟がゝつた事を言はずに、話を進めて行くのが私の趣意であります。出來るならば面白く話をして見たいと思ひます。

我々日本人の多數が、自分たちの昔の生活も、少しは知らせて貰ひたいと言ひ出したのは、つひ近い頃からのことです。今迄は其要求に對して用意がしてありませんでした。文字で書殘された本や日記や證文の中に、此方面の歴史の材料が丸で無いとすれば、次には是非とも今居る人に就いて、調査して見なければなりませぬ。他にも何か方法があるかも知れぬが、現在では殆と是が唯一の手段です。さうして人の心を最も上手に讀むことの出來る者は、男よりも女の中に多く居るのです。

成程今居る日本人は、全部が百年より此方に、此國に出現したに相違ありませぬが、それは決して偶然の出來事では無かつたのです。彼等の顔形、髪衣裳から日々の生活ぶり、怒つたり感心したりする心持まで、一として由つて來る所の無いものはありませぬ。遺傳と謂ふとめい〳〵其親に似て居ることだけを意味しますが、國を一つにして住みますと、いつの代の從兄弟であつたか知れ

ぬ人々までが、言語を始として、互ひに共通なものを澤山に具へて居るのです。

我々は今啼く鶯時鳥の聲を聽いて、歌に詠まれた古今集の時代にも、此調子で昔の人の心を動かしたことを知り、松や柳の年々の若綠を見て、以前の春の姿を想像し得ます如く、家は百年二百年を以て建て替り、稻は秋毎に刈收めて食べられ、一つとして前の物は殘つて居ませぬが、尙言はず語らずの間に千年以前の祖先も、やはり同じ事をして活きて居たものと、思つて居るのであります。人の心の持ち方ばかりが、さう走馬燈の如く改まつて來た筈はありませぬ。故に現在の我々の癖や習慣からだけでも、色々の昔の社會相が、類推して行かれる道理です。其上に人は殆と無意識に、大切な古い實驗を記憶して居るのです。只今日まで心を留めてそれを考へて見ようとしなかつたゞけであります。

尤も文字の學問が始まつてから、我々の生活だけには著しい變動が現れました。殊に自由に外部の異分子に接して、其感化を受けることの出來る人ばかりが、何處に往つても群の突端に出て居まして、書くにも物言ふにも常に全體を代表する形がありました故に、一寸見ると世中は急に改まつてしまふやうですが、實は古風といふものは只之に包まれて居るだけで、變化の激しい程、愈々在來のものが隱れて遺ることになります。歐羅巴諸國の耶蘇教化などは誠に好い例で、千年以上村々には會堂があり、牧師が永住して居ましても、今でもまだ氣を附けて觀ると、そちこちに其以前の思想なり、慣例なりが取續いて居たのです。

都會の大通りを歩いて見ますと、男も女も既に洋服と靴になつてしまふ時が、目の前まで來て居るやうでありますが、數から言ふとそれは至つて少しのもので、おまけに其衣裝の一つ下には、日本人で無ければ持たぬやうな、考と感情

が皷動して居ます。教育は現在是だけ普及したのですが、眞に新式に自分を現す人は尙稀で、形ばかりの眞似が多い上に、其眞似すらも出來ない人々が、又大變に居るのです。永い間には勿論此人たちも、次第に間接の感化を受けずには居ませぬが、現在ではまだ二筋の流になつて併行して居ます。

たゞ古風の部分は遠慮がちで、今までも久しく外に現れることが無かつた爲に、是ほど重要なる社會上の事實なるにも拘らず、案外に學問から顧みられなかつたのです。正しく人生と國の本質とを理解しようとする者は、單に冷淡であつてはならぬのみならず、進んで其隱れた奥を窺ふことが必要ですが、感覺の鋭敏で又暖かい同情を持ち得る人で無いと、此方面の觀察には適しないのです。故に何よりも先に、聰明なる女性に、此事業の興味を覺らしめるのが順序であります。そこで私は、今日村々の老いたる人々の頭にしか殘つて居らぬ、昔話といふものゝ歴史上の意味を、僅かばかり說いて見たいと思つて、此の和泉式部の話を書いて見るのです。辛抱をして終まで讀んで見て下さい。

誠心院の大きな石塔

私は別に此人の傳記に就て、深い興味を持つて居るわけで無い。只和泉式部と云ふやうな、一人の中世の女性にも、其周圍を繞つて澤山の、曾て顧みられなかつた問題が殘つて居り、ぢつと見て居ると中々大切な日本人の歴史が、其蔭に潜んで居るらしいといふことを、話して見たいのです。多分話をして居るうちには却つて皆様から注意を受けることが多からうと思ふ。さうして結局は、單に六つかしい一つの問題を、提出して去ることになるかも知れぬ。

和泉式部は決して非凡な人傑でも何でも無い。境遇と時代とに稍特色があるのみで、學

問も文才も共に一通りであるのに、如何いふわけか後世になる程、次第に有名にならうとして居ます。定家卿が選定したと傳ふる百人一首が、歌骨牌になる迄盛んに行はれたことが、一つの原因であることだけは疑がありません。しかも彼女の眞の事蹟は、實はほんの些ししか分つては居ないのです。例へば幾つの年に、何時何處で歿したかと去ふことさへ、信用し得る書物には一つも見えて居らぬに拘らず、諸國の田舍には往々にして其墓が在る。さうして之に關聯して珍しい昔話を語り傳へて居る。墓などは一人に一箇宛のもので、從つて他の全部は必ず虚僞、若くは誤謬、若くは何か別の理由が無ければならぬが、どうして又正直なる地方の人が、之を信ずるに至つたか。實は私以外には今まで之を疑はうとした人も少なく、斯ういふ傳說のある土地々々では、各自獨立して眞面目に之を信じて居ました。そこに多分は何か共通の事情が、隱れて居ることと思ひます。

御承知の通り和泉式部は、上東門院の侍女でありました。後に二度までも地方官に緣付いた爲、あの時代の京都の婦人としては、珍らしく田舍の旅の經驗を持つて居ましたが、尙歌集などを見ると悉く都會生活を以て充ち溢れ、天然に對する愛慕は勿論、願ひ歎び一つとして、村の人らしい、情緖を述べたものは無いので、歌を狹隘な都府上流だけの藝術にしてしまつた責任は、同じ百人一首の中の式子內親王などよりも、却つて此婦人の方が多く分擔せねばならぬ位です。

それ故に若し歷史に此人の生死が傳はらなかつたとすれば、大抵よい程の老齡に達して、京都の內で生涯を終り、墓所も此附近にあるものと推定しても不都合は無いのであります。併し單純に其理由から、現在京都に在る和泉式部の墓を、正しいものと認めてよいかと云ふと、それは又甚しく不當であります。ところが今日の學者といふ人の中には、この位の程度で不完全な斷定をしてしまひ、地方人を誤りに導いた者が隨分あります。例へば國造本紀と云ふあまり確かで無い古書の中に、大昔の諸國の名族の名が載せてあるのを見た者が、後日其近くの地方で古墳でも發見せられると、すぐに其人の墓だと謂つてしまふ類であります。

京都では寺町通り、六角と蛸藥師の間の西側の町を式部町といひました。百四五十年前までは和泉式部町、又は和泉式部前町と謂つて居ました。路を隔てゝ東側の新京極通り六角下ル中筋町四百八十七番地の誠心院といふ寺に、可なり久しい以前から、和泉式部の木像と稱するものを安置し、寺附屬の墓地には、又同じ人の墓と云ふのがあつた爲であります。石塔は寶篋印塔形の、座石三重總高さ一丈一尺六寸、横八尺といふ雄大なもので、傍には二十五菩薩の石像が彫られてあつた。圖を見ると勿論製作はずつと後世のもので、取分け不思議なのは石の面に、正和二年五月の文字が刻してあつたと云ふことです。是は和泉式部の生存より遙か後の、鎌倉期の終であると共に、この石塔の出來たと思はれる時代よりは、又ずつと前の年月である。如何なる事情からそんな文字が、いつ迄も此墓に伴ふことになつたか、問題の一つの糸口は此方面からも開けて來ます。

四十餘りの尼姿

京の誠心院に古くから、和泉式部の木像として傳へたものは、既に松平樂翁の集古十種の中にも採錄せられて居る。私は實物をまだ見ないが、それよりも更に以前の書物に、詳しく其の姿を述べてあります。年は四十ばかりの尼で顔美しく、墨染の衣に花色の布帽子を被つた坐像とあり、若狭の小濱の法印寺にあつたといふ、有名な八百比丘尼の像を始とし、同じやうな木像は隨分國々の寺にあるものです。

此木像と境内の大きな石塔とを、和泉式部のだとする説は、我々が名づけて傳説と謂ふものであります。或時代には土地で之を信ぜぬ人は殆と無く、從つて多くの書物にも書留め

られて居ますが、尙其爲に之を歴史と承認することは六つかしいものです。歴史にも幾らも間違ひは有り得ますが、少なくとも現在我々の認めて居る歴史には、實際曾てあつたと云ふ證跡があります。ところが誠心院の方は記憶だけで、別にさうかも知れぬと思ふだけの、材料は無かつたのです。此寺の庭には老木の梅が一本ありました。其名を軒端の梅と稱し、昔和泉式部が栽ゑて詠めたと云ふ軒端の梅は、此樹であるかの如く謂ひましたが、それが到底信用し得られぬ作り話であつたのです。

と申す理由は、誠心院が京都寺町の今の處に始めて建つたのは、天正十九年のことであります。或は同十三年とも申しますが、兎に角に信長光秀の時代には、まだ此邊には寺も石塔も無かつたので、其前には一條小川の北、今日元誓願寺町と呼んで居るあたりに在つたのを、其の誓願寺ともろ共に、爰へ移したのであります。和泉式部の軒端の梅は、謡曲の東北にも有るやうに、もと東北院と云ふ寺の内にあつたと謂ひます。東北院は式部が奉仕した上東門院の御所であり、持主は御父の藤原道長で、又京極殿とも申して居ました。

即ち同じ一條でも京極の東、今の御苑の地よりも更に鴨川に近く、正しく都の東北に當つて居ます。後に其跡を寺にしたのが、小御堂とも呼ばれた所の東北院であつたのです。

その東北院は夙く退轉して、もう元の場所がはつきりと分らぬやうになりました。誠心院の方ではそれが一條小川に引越して來て、誓願寺と隣同士になり、寺の名も今風に改める事になつたと謂つて居ますが、是亦確かな證跡が有るわけでは無いのです。其上に鴨川の川東には吉田黒谷よりも更に東方に、別に又一つの東北院があつて、軒端の梅はもと此寺内に在つたと傳へて居りました。さうして其處にも一つの和泉式部の石塔が、ちやんと出來て居たのであります。東北と云ふ謡が作られた時代の東北院は、もう此邊の岡の上でもよかつたかも知れませんが、昔御堂關白道長が、美々しい行列で門前を行き過ぎる音を聽いて、才女で少しく臆面の無い和泉式部が、

門のそと法の車の音きけば　われも火宅を出でぬべき哉

と吟じた場處としては、あまりに郊外に引込み過ぎて居た樣に思はれます。其上に上東門

院の御住居を寺にしたと云ふ舊記とは一致しませぬ。

何れにした處が誠心院の軒端の梅は、元から爰に無かつたことだけは明白で、後の移植だとすれば、少しも石塔や木像の說明にはならぬのです。第一に和泉式部が歿してから、五百年以上も經た老木が、根こぎにして持つて來られたとは思はれませぬが、我々の祖先は傳說を尊重する餘り、斯ういふ場合には舊樹の蘖（ひこばえ）と謂ひ、又は枯れ跡の栽ゑ繼ぎと謂ひ、それでも尙信じにくければ、是が最初の樹の種の芽生だとも謂ふのです。種なら一本の古木から、幾つに分れても仔細は無い。昔話もちようど此通り、やはり何か相應の因緣があつて、次から次へ持運ばれて、國々の土に根を下すことになつたものとすれば、目に見えぬ種子の力だけは、結局之を認めないわけには行かぬのであります。

一遍上人と幽靈

そんなら何ういふ因緣から、此寺の老木の梅を軒端の梅と稱し、尼の木像を和泉式部と謂ふことになつたかと考へて見ると、澤山の今まで隱れて居た問題が、皆樣の注意を引くことになりますが、その最初の小口は、やはり北隣の誓願寺との關係であります。

元來この誠心院といふ寺の名はあまり古い記錄には見えて居りませぬ。今日の言ひ傳へでも、寺は現在は眞言宗で、東山の泉涌寺の末寺となつて居りますが、以前には淨土宗で、この誓願寺の塔頭、卽ち寺內の一坊に過ぎなかつたと申します。何か隣同士まづい爭ひでもあつて、分離したものかと想像せられますが、誓願寺は法然上人を開山とする有名な念

佛道場で、中古は今日よりずつと大きかつたやうですから、同じ宗旨の寺内の子院であつた以上は、誠心院の名が此に蔽はれて居たのも不思議はありませぬ。さうして以前の書物には、式部の墓は誓願寺に在ると申して居るのであります。

この誓願寺には新しいのと古いのと、二つの緣起の繪卷物がありまして、共に今國寶となつて居ります。此中には和泉式部のことも述べてあるのですが、果して法然が此寺を建てたとしても、それは式部が死んでから百數十年の後の事であり、緣起の出來たのは、それから又數百年おくれて居ます故に、今から見れば古いものであつても、確かな記錄とは謂はれません。たゞ繪卷の出來た時代に、世間の人が專らさう言つて居たことを、正直に筆に殘したまでと見てよいのであります。

足利時代の中頃には、誓願寺は民間佛敎の一つの大きな中心であつたやうです。さうして和泉式部の亡靈が此道場に遺つて來て、冥途の苦艱を濟つて貰つたといふ話が、行はれて居たかと思はれます。「誓願寺」と謂ふ謠曲は其話を能の舞にして居ります。遊行派の聖の第一世、一遍上人と云ふ名僧が、熊野から還つて來て此寺に留まり、念佛の力を以て衆生を化度せんとして、六十萬人決定往生の札といふものを配つて居たときに、見馴れぬ女性が一人尋ねて來て、遊行の上人と問答をした。それが和泉式部の幽靈であつたといふのです。

「わらはが住みかはかの石塔」と言つて、自ら墓所を指さしたとありますから、或は其頃既に此寺に葬つたといふ說が行はれて居たのかも知れませぬ。併しそれは今の寺町の地へ引移つて來たよりも、遙か昔のことですから、その場所は實は不明なのです。此寺の門の額は、もと誓願寺の三字であつたのを、上人が亡靈の望みを容れて、六字の名號に書き改めたと謂つて、それが永く殘つて居ました。又同じ謠曲の中に、二十五菩薩の事を謂つて居ますが、其御像も今ある石塔に彫刻してあります。卽ち此寺を和泉式部の故跡とすることは、悉く僧と亡魄との問答に基づくものでありますけれども、昔の人が一旦之を信じた結果として、段々に今では歷史らしくなつてしまひました。

まぼろしと夢の告

昔の世の中には、そんな事は幾らでもありました。殊に代々の遊行上人は、諸國をあるいて迷うて居る靈魂を救ふのを職分として居ましたから、折々斯ういふ年久しい古墓を、新たに見出すことがあつたのです。石川縣では柴山潟の近くの松林に、齋藤別當實盛の墳墓として、今は史跡の一つになつて居るものなども、實盛が討死をしてから二百七十何年の後に、或る遊行の聖が此邊を通つて居て、彼の幽靈に出逢つて頼まれて供養をして遣つてから、引續いて加賀國へ旅行する毎に、此處で法會を營む例となつて居た爲に、結局其時に建立した石塔が、實盛の墓標の如くなつてしまつたのであります。

念佛の大なる力と之を説明する頓生菩提の教理とを信じない者には、是だけの出來事から、數百年前の埋もれた史實を、發見したと謂つても承知は出來ませぬが、昔の人には殆と疑ふ餘地は無かつたのでありまゞ。幽靈にもせよ、兎に角に本人が出て來て、自分でさういふのだから本當であらうと考へました。尤も後世になると、見ないものを見たといふ上人も稀にはあつて、自然に人が用心をして聽くやうになりましたが、それでも寺々の緣起類を、丸々作り話の如く取扱ふことは出來なかつたのであります。

日本古來の言ひ傳への中には、聽く人も說く人も、共に牢く之を信じて居ながら、しかも事實には反するものが、まだ他にも澤山あるのです。和泉式部の墓所の如きも、此頃になつて氣が付いて見ると、全國に亘つてそちこちにありまして、單に是迄は互ひに知らなかつたばかりに、今となつてはそれを虛誕だと言ふと、土地の人が承知をせぬやうになつてしまつたのであります。

京都の一番有名であつた故跡すら、前に申す通りでありました。だから我々は眞僞を究

めるよりも、先づ如何なる理由から、其樣な事を言ひ始めたかを、考へて見ようとするのであります。東京の近くでは、房州の那古の觀音堂の後の山に、二つの塚が向き合つて居て、それを和泉式部と娘の小式部との墓だといふことを、百年ほど前から言ひ出して居ます。此地方へは曾て一度でも、彼女が來たといふことがもう疑はしいのですが、同じ頃から附近のそちこちに、故跡といふものが現れたのであります。

その中でも元の平郡の米澤といふ村の山には、徑三尺ばかりの圓形の平石が二つあつて、之を式部の合せ鏡と稱し、それに相應した傳說もありました。此附近には尙昔風の大きな石塔があつて、それを此人の墓と謂ひ、現に今から二十年ほど前にも、一時大變に流行したことがありました。ところが此墓を和泉式部と言ひ出した事情は、幸にして記憶して居る人がありました。さして古い時代でも無い樣ですが、竹原と云ふ村の木樵が毎度此山に入つて仕事をして居るうちに、古塚を見出して如何なる心持からか、之を淸めて花を上げ、自分の辨當を供へたりなどして居ると、或夜の夢に氣高い婦人が來て、自分は和泉式部だと謂つて厚く禮を述べた。それが塚處をこの歌人の故跡とするに至つた原因であると、安房志といふ書物には記して居ります。

靈驗は靈夢から

安房に和泉式部の墓があることは、今でも信ずる人が少しはあります。地方の歷史家などは之を疑ひつゝも、或はそんな事があるのかも知れぬと、考へて見ようと致します。例へば式部の後の夫、平井保昌といふ武士は、源賴光の友人でもあり又子分のやうな人でもあつた。其賴光は曾て上總介に任じたことがあるから、其頃に平井氏又は其一族が、隣國の安房に來て居たかも知らぬ。さうして和泉式部は此地まで下つて居なかつたにしても、

遙かに死亡の報知を得て、追善の爲に塚を築いたといふやうなことが、無いとは言はれぬなどと申して居ます。

安房と上總は今でこそ一續きの千葉縣ですが、中世は別々の國司を置いてありました。さうで無くとも是ばかりの僅かな緣故から、この婦人の墓所が安房國に、在つてもよいやうに謂ふのは無理であります。つまりは學問は此の如く確かな基礎のないものでも、尙多數の人の一般に信じて居るものを、無視することが出來なかつたといふ實例の一つに過ぎませぬ。

我々の考へて見たいのは、それよりも今一段と源に溯つて、何故にたつた一人の木樵などの夢に見たことが、忽ちにして弘くその地方の全體に、信用せられることになつたかといふ點でございます。今日では「夢でも見たか」と謂ひますと、最もつまらぬ人の話を、輕蔑した言葉になりますが、そんな風には昔の人は見て居なかつたのであります。靈夢と申して多くの取止めも無い夢の中に、後先のはつきりとして殊に印象の鮮明なものだけは、古くからの習ひで之を意味の有るものと考へ、覺めて後まで異常に人の心を動搖させたのであります。夢判斷と稱して好い夢惡い夢を區別し、一富士二鷹三茄子などゝ、如何なる夢でも何かの啓示であるかの如く、氣に懸ける人が今でもあるのは、その昔風の名殘であります。

或は又夢の御告げを待つなどと稱して、自ら進んでその啓示を豫期した者さへありました。林野の奥に入つて不意に古塚などを見た人は、もう其心持がやがて夢を信ずるやうに變化して居たので、果してほゞ期待した通りの夢を見ますと、一も二も無く之を信用してしまふのであります。固く信ずる人の眼つきと、作りごとをする者の眼つきとは、幾ら質朴な村の人にも見分けられます。其上に話の聽き手も、ちようど同じ樣な場合には、同じ樣に感動する人たちですから、一人の實驗が直ぐに多數の隣人に承認せられ、所謂靈驗を生ずるのであります。

靈驗とは願ひ事を叶へるといふことを意味します。諸國の流行神には夢から始まつたも

の〻多いのは、全くは靈夢が靈驗を誘致するからであります。三州横山話といふ本に、長篠の古戦場近くの御料林の中に、淨瑠璃姫の御墓があり、明治三十年頃、早川熊十といふ人の夢枕に三夜まで立つて、私を祭れば一切の願を叶へると告げてから、一時參詣者が雲集したといふなども、澤山ある類例の一つです。姫は北國の矢矧の長者のまな娘で、義經の思ひ者でありました。其墓どころは東三河の諸處にあるやうですが、少なくとも長篠方面だけでは、この夢と此信心とで、先づその故跡が確定したことになるのであります。

深山と美しい上臈

夢から傳説の發生する場合もあることが、先づこれで證明せられたとしても、まだそれだけでは話の種までが、わかつたのではありません。三州長篠では北山御料林の内に、長者の姫の故迹があることは、前から土地の人たちが語り傳へて居りました。さうで無くても淨瑠璃姫の物語は、故郷であるだけに久しい間、既に此處には行はれて、氣高く美しい女性の話が出るたびに、屢々思ひ出されて居たことでしようから、それが忽然と心有る者の夢に、顯れたと謂つても不思議は無いのです。加賀の篠原の齋藤別當にしても、討死をしたのは正しくかのあたりで、盛衰記平家物語をよく知つて居る旅人なら、通行に際して必ず之を思ひますから、其亡魂がまぼろしに見えたのも、寧ろ當り前だつたかも知れませぬ。

之に反して房州と和泉式部とは、見たところ餘りに關係が無い。木樵が非常なる空想家か學者かで無い限、なぜ又山中の古塚を拜んで、急に八九百年昔の京の歌人などを、夢に見ることになつたかゞ問題になります。第一に和泉式部といふやうな婦女の名が、何時の間にか村民の記憶に留まり、さてはあの人の墓だつたかと、云ふやうな話になつたのが意

外です。何とかして其わけを考へて見なければなりませぬ。

百人一首は或は一つの原因とも言へましようが、あれは普通の寺子屋の教科書でも無く、又其中には持統天皇を始にして、歌を咏んだ貴女が二十何人も出て居ます。獨り「あらざらん」の作者のみが、注意せられるのには、別に何かの原因が加はらねばならなかつたのであります。自分たちが一番安らかな想像説と思ふのは、米澤部落の山の中で、古い墓を見出したよりもずつと前に、少なくとも尙一度、此地方で和泉式部に關する他の傳説が行はれ、うす〳〵は之を記憶して、又稍忘れようとした者が、多かつたかといふことであります。書いたものでは何も殘つては居らぬやうですが、多分は那古寺の觀音さまの靈驗と關聯して、曾て此名を耳にする場合の多かつたことが、知らず〳〵夢にその人の姿を見るまでの、親しさを養つたものかと思ひます。

但し果して此推測が當つたとしても、まだ一つ問題は殘つて居ります。人里を離れた山の中に、塚や苔むす石塔を見出して、驚き畏れ又奇緣を感ずることは、普通の人の情ではありますが、何故に之に由つて敗軍の武將とか旅僧とかを夢に見ずに、最も山や林とは緣の少なさうな和泉式部などを想像したらうか。是は東三河の淨瑠璃姫も同じことで、假に土地には大分古くから、知れ渡つた上臈の名であつても、特に斯樣な荒山中の古塚に、玉の肌を埋めたと考へるのには、何か又多少のよりどころが有つた筈であります。夢だから勝手次第といふわけにも行きませぬ。大凡は人々の知識なり感情なりで、さもあるべしと思ふもので無ければ、夢にも見ず、見てもそれを正夢として、信じ傳へることは出來なかつたらうと思ひます。

ところが日本では飛驒とか信州とかの、此邊よりもつとひどい深山幽谷にも、姥・尼・姫御前に因んだ地名が極めて多く、往々にして又美しい女性が隱れ住み若くは迷うて死んだといふ話があります。我々にはもう事情が不明になりましたが、山と氣高い上臈との間には、何か昔は隱れたる聯想があつたらしいのであります。

美女の木の由來

山と婦人生活との關係を考へる爲には、ずつと前代に遡つて、我々の祖先が山嶽の神々を、貴女の御姿に想像して居た事例から、說起さなければなりませぬ。平地の村々の鎭守の神は、多くは白髮の翁の體で、出現なされたと言ひ傳へるのに反して、靈山の奥に入る者は、往々にして若くあでやかなる神女の御容を拜むことがありました。加賀の白山の菊理媛命は、其の最も有名な一例でありますが、比叡山の聖女廟でも、金峯山の子守勝手の二柱でも、神を女體として崇敬した習ひは久しいのであります。

下野日光山の古い緣起に就ては、以前「神を助けた話」といふ本に書いて置きましたが、大昔この御山と赤城山との間に神戰があつた時、弓術に秀でた若い勇士の前に現れて、援助を求められたのは姫神でありました。奥州津輕の岩木山に於ては、最初に安壽姫津志王丸の姉弟、先づ此山の頂上に登つた者が、留まつて神となるべしと約束し、弟が百澤寺の獅子踊を見物して路草をして居るうちに、姫が先づ到着して此山を支配することになつたと云ふ話があります。岩手縣の早池峯山を始として、諸國の名山に伴ふ三人の姉妹の話、卽ち一番好い夢を見た者が、この山の主にならうと約束して寢た夜中に、末の妹が目をさまして見ると、姉樣の胸の上に一房の紅い花が天から降つて居る。それをそつと取つて自分の胸に載せ、朝になつて之を見せて、約束通りに好い山を取つたと云ふ物語なども、何れも山の神を女性として居るのであります。其他の府縣でも山神社の祭神が、現在は十の六七まで木花咲耶姫尊になつて居ますのは、前から土地の人が女の神樣と、考へて居た證據であります。

山の神の女性は、多分は其祭を管掌する者の、女性であつたことを意味するかと思ひま

す。神は通例は祭の時に、仲に立つ齋主の身體へ御降りになる習でありました。神に代つて祭を享け、又神意を取次いで語る者が婦人であつた爲に、久しい間には神も亦、やさしい御姿に想像せられたものかと思ひます。白山や越中の立山、佐渡の金北山其他の山々に、尼が登らうとして石に化したといふ話の多いことは、折があつたら後に又申しませう。尋常民家の妻娘には、登山を嚴禁した山であつた故に、尼も亦罰を受けて化石したかの如く、後には説明せられるやうになりましたが、彼等が何れの地でも言ひ合はせたやうに、法力の優れた修行者であつたと傳へるのは、即ち或時代には靈山に入つて、祈禱行法をした一種の婦人のあつたことを推定せしめます。

尼は又姥とも申しました。これは單に專門の宗教家といふ迄で、尼と謂つても髪を剃つたとも限らず、姥と謂つても老いて醜い者のみでは無かつたかと思ひます。立山などでは若狭のトウロの姥、美女をつれて登つたと申します。それは現在美女石といふ石のあるのを、姥とは別であらうと考へて、二人に分けて説いたもので、美女石美女木といふ類の名所は、結局は同じ類の旅の上臈が、山に入つて神祕の修法をした故跡に他ならぬと思ひます。さうして又本篇の主人公和泉式部に關しても、此風習を證明するやうな話が古くからありました。

山に登らんとする式部

靈山の御頂上の極めんとして、許されなかつたといふ女性の名を、加賀の白山に於ては醯（トホル）の尼と謂ひ、越中の立山に在つては若狭國の登宇呂の姥と謂つて、何れも御山の中腹から上に、其故跡と稱する巖石や樹木がありました。大和吉野の金峯山に於ても、やはり一人の仙女が登つて行かうとして、風雨に妨げられて大に怒り、術を以て大蛇に乘

つて去つたなどといふ話が、古い昔からありまして、其仙女の名を亦都藍尼（トランニ）と傳へて居ます。つまり今日では意味が不明にはなりましたが、この三つの山に共通した物語、殊によく似た女性の名には、何か曰くがあつたやうです。

又福島の信夫山には、昔信夫文字摺とかいふ石があつて、草の葉を以て此石を摺ると、死んだ人の姿が現れたと言ひ傳へ、遠い國から其話を聞いて、遙々尋ねて來て尋ね當らず、失望して歸つた上蔦がありまして、それは曾我物語で有名な大磯の虎であつたと謂ひますのも、やはり同じ話の變化であらうと思ひます。虎は又富士の裾野の曾我兄弟の墓へも尋ねて來て、路から返つたといふ口碑もあります。此等は決して偶然の一致で無く、女の身を以て諸國を旅行し、普通には憚られて居る靈山の奥まで、自由に入つて行かうとした者があつたことを、意味して居るのではあるまいか。さうしてトラといふ名前の如きも、此種の宗教的職分の婦人の總稱であること、例へば上古の巫女の生日足日のタル、大帶姫などのタラシと、同じ語源から出たものでは無いかと、考へて居るのであります。

然るに今日傳はつて居る和泉式部の傳記にも、どういふものか段々之とよく似た逸話があります。例へば新千載集といふ勅撰の歌集に、或時和泉式部の家の前を、女郎花を手に持つて一人の法師が通りました。何處へときくと比叡山の念佛堂へ、立て花に參ると申しますので、次のやうな一首の歌を詠んで、其花に結び附けたと謂ひます。

名におはゞ五つの障りあるものを、羨ましくも登る花かな

其意味は女には五障と謂つて、佛の御前に近づくことの出來ぬ故障が多いのに、女郎花は名は女でも、斯うして御山にも自由に登るのは羨しいと、いふつもりでありましようが、文法から謂つても言葉の用ひ方から考へても、到底此人の作とは思はれぬ手筒な歌でありました。それに初秋の立て花といふことは、和泉式部の時代には言はぬことで、比叡山は僧律がある爲に、一般には女人の登拜を禁じて居ましたが、所謂卯月の八日だけは昔から、花摘と稱して女が花を折つて、佛に供へることが出來ました。此時式部はどこに住んで居たか知れませぬが、法師が京から、女郎花のやうな野の花を採つて山の上まで携へるとい

ふことも、有り得べからざる話であります。

山城名跡志といふ書物には、下鴨から二町ほど北の小川を泉河と謂ひ、此女性の住居があつた故に此名が生じたとありますが、信用し難い話であります。泉河は泉から流れる川としては普通の名で、此邊に式部が居たといふのも只の想像であつたやうです。新千載集は和泉式部の時代から、僅か二百年の後に出來た歌集なのに、もう此樣な少し考へたらわかる誤りを、信じて採用して居たのであります。

勅撰集中の傳說

二十一代集と呼ばれた和歌の選集は、歷代朝家の思召に由つて、出來たのには相違ありませんが、世に傳ふる所の歌の作者の、正しいか否か迄を保障し得る事業では無かつたのです。殊に鎌倉期に入つてからは、歌の道がひどく衰へまして、作品の優劣を判別する標準も狂つて來た上に、やはり今日も同じやうに、久しい傳說にはうかと捕はれる弊がありました。誰が言ひ出したか、何に出て居るか知れぬ話でも、單に有名な和泉式部の歌といふばかりに、事情も言葉遣ひもよくは考へて見ずに、大切な歌集に書込んで、後人をして確信せしめることになつたのであります。

是と半分ほど似た話で、今一段と評判の高いのは、續千載集其他に載集せられた紀州熊野の歌であります。熊野で本宮の御社の近くに、和泉式部の石塔と謂ふものがあり、又其參詣路の東牟婁郡三里村大字伏拜(フシヲガミ)にも同じ人の塚があるさうです。勿論兩方とも、爰に埋めたといふのではありませんが、少なくとも貧て此御山へ式部が參詣した事實だけはあつて、石は其折の記念の如く傳へられて居るのであります。しかも碑の面には之を意味する文字も無く、たゞ前に申した歌の集に、さういふ話が出て居るからと、云ふ

だけが理由でありました。

續千載集に依れば、和泉式部本宮に詣らうとして、伏拜といふ處に來て一泊しますと、念に身の樣子が變つて、奉幣が不可能になりました。そこで次のやうな歌を詠んだと謂つてあります。

はれやらぬ身にうき雲のたなびきて月のさはりとなるぞかなしき

さうすると其夜の夢に、神自ら御答の歌を御示しになりました。

もろともに塵にまじはる神なれば月のさはりも何か苦しき

との二つの歌は二つとも、作者の名譽の爲に是非否定せねばならぬほど粗末な歌であります。最も手短かにをかしい點を申しますと、はれやらぬといふことは意味を爲さず、浮雲のたなびくといふこととはありませぬ。又神歌と稱する方は、所謂和光同塵の意を托したのでしようが、本末の關係があやしい上に、差支が無いといふことを苦しからずと謂つたのは、神にふさはぬ中代の俗語でありました。從つて二首ともに僞作といふことになり、歌は僞作で事柄だけが眞實といふことは、有り得ないのであります。

實際又熊野參詣の盛になつたのは、和泉式部の頃よりも少し後からであつて、或は此樣な手筒な歌を詠んで身を歎き、更に又神から許されたといふ夢を見た、女の道者もあつたか知れませんが、故障のある婦人が參拜を制せられたのは多分一般の作法で、特に名歌の德を以て、此作者のみが許されたといふのが、話の骨子だとしますと、歌がまずければ話にはなりませぬ。どうして又堂々たる選集に之を載せたかと考へますと、つまりは其當時、專ら此靈夢の奇瑞を談ずる者が、熊野に往來した京の人に多かつた爲で、それは亦誓願寺の念佛功德を、熊野の信仰と結び付けようとした、一遍上人の門徒ではなかつたかと思ひます。尙伏拜といふ地名は遙拜處といふ事で、伊勢を始として諸國の大社の周圍には、何かの理由があつて參籠の出來ぬ者の爲に、特に幾つと無く設けられてありました。女が伏拜に來て信心をするといふことは、靈山の中腹に女人堂といふものがあり、女人結界石があり、又白山、立山、日光、金北山等の麓に近く、姥石、比丘尼岩などがあつて、登山

困難の口碑が殘つて居ると同じ意味だと思ひます。

歌のにせもの

所謂歌盗人の流行する今日の時勢から見れば、どうして昔は此樣な餘計な事を、企てる者があつたかと不審しますが、實は必ずしも惡氣があつてで無く、やはり房州の古塚の由來などと同じく、聽く者說く者共にごく無邪氣に、さう思つて居たのかも知れません。所謂勅撰の歌集にまがひ物があるといふことは、寧ろ大膽なる斷定ではありますが、中世人の物を疑はぬ美質を考へ、更に類似の例の最も極端なものを擧げて見ると、成程それも研究だといふことが、認められるだらうと思ひます。

宮川舍漫筆といふ書物の卷一に、次の如き話があります。勿論江戸時代の半ば以後のことです。甲州韮崎附近の或寺に一つの古墳があつた。之を取拂はうかと相談をして居ると、夜寺僧の夢に貴とげなる女性が現れて、歌の短冊を一つ枕上に殘して去つた。不思議に思つて古筆家に鑑定を賴むと、紛れも無い赤染衞門の筆跡でありました。それに驚いて塚を大切に保存し、赤染衞門の菩提所と名乘つたことは、書いては無いけれども想像することが出來ます。さうして其歌といふのは、

なき跡のしるしとなれば其まゝに訪はれずとても有りてしもがな

是に對してはわざと註釋と批評とを控へて置きますが、兎に角に短冊といふものは、赤染衞門の見たことも無かつた用紙でありました。

我々の問題にして居ますことは、何故に飛んだ田舍に度々上臈が夢に見え、又色々の不思議の歌が、屢々斯ういふ階級の女性にばかり托せられたかであります。古事談といふ話の集は、夙く鎌倉時代に出來た本と思はれますが、其中にも次のやうな一節があります。

空也上人云

極樂はなをき人とそ參るなれ　曲れることを永くとゞめよ

和泉式部

ひじりだに心に入れてみちびかば　まがる〳〵も參りつきなむ

二首の體裁から判斷すれば明白に贈答の歌ではありますが、それが此上も無く變なのであります。空也は天祿三年卽ち西曆九七二年に、七十ばかりで歿した上人で、今日に殘つて居る和泉式部日記が正しいとすれば、式部が世盛りで戀歌などを詠んで居たのは、それから三十年後の長保四年であり、到底空也の在世中に、斯んなくねつた歌を詠むまでに成熟して居たとは思はれませぬ。この二人の男女に對談をさせることは、幽靈となつて二百五十年後の一遍上人に逢はせるよりも、更に一段と六つかしい話でありますが、それでも最早此頃になると、さもありなんと思ふことが出來たのであります。

それには和泉式部が如何にも活潑な、少しは出過ぎるといふ質の才女であつたことも、

や〻此想像を助けたかも知れませぬが、原因は勿論それのみで無かつたのであります。彼女の時代を去ること遠からず、否、多分は其在世中に、完成したかと思ふ拾遺和歌集には、最も感動に値する一首の歌が採錄せられ、それが略ぼ亦同じ方向を示して居ました。

くらきより暗き道にぞ入りぬべき　はるかに照らせ山の端の月

是はあの時代の人の佛法に對する渴仰を、代表した作として讃歎せられて居ますが、しかも注意を要するのは單に「性空上人のもとによみて遣はしける」とあり、又「遙かに照らせ」ともあつて、少しも作者の田舍旅行を語つては居ないのに、後久しからずして曾て性空の住んだ山々に、やはり登らんとして許されなかつた物語が、ちやんと又發生して居たのであります。

書寫山の和泉式部

婦女新聞の社長、及び此話の筆者等が生國播州には、近世まで何ケ所とも知れぬ程、色色の和泉式部の故跡がありました。其原因の一つは書寫山の性空上人との關係、と言ふよりも寧ろ「くらきより」の一首に在ると思ひますが、事情は決して單純なものでは無かつたので、もと〳〵當人に、若くは此類の婦人に、末に傳說の中心となるべき因緣が無かつたならば、是ほど興味ある變化を示すことは出來なかつたのでありませう。

性空上人は上代の行基菩薩、役行者、白山の泰澄、日光の勝道、弘法慈覺の兩大師、それから又空也一遍法然親鸞等の諸上人と一貫して、尊き旅の聖であり、又民間佛敎の英雄でありました。貧しき人々の心の糧、美しい夢の種は、譬へば淸泉の如く此水上から流れ出て居ます。和泉式部の名歌を此上人に捧げたといふことは、國民一般の信仰から考へても、大なる結緣でありました。從つて其後久しからずして、發生しさうな傳說が、至つて自然に發生して來たのであります。殊に此上人はなまめかしい女たちの生活から、淸い佛の御姿を見出さうとした聖者として、早く知られて居た僧なのであります。

和泉式部が播州の書寫山に登つて、性空上人に見えたといふ話は、三國傳記の卷八などに出て居ます。それから大分おくれて、足利の末に成つたらしい京の誓願寺の緣起は、多分は此等の內から採つたのでありませうが、文章にも趣向にも若干の潤飾があります。そこで三國傳記の方から大要を拔いて見ますと、此旅行は甚だしく大袈裟なもので、式部は上東門院を御勸め申して、他の同僚の官女と共に一行八人、都を出でて密かに播州に下りました。書寫では前日の夕に、性空上人門弟たちに向ひ、明日の晝頃八人の鬼が來るから、逃げ去るやうにと謂つて隱れしめ、自身も亦持佛堂に籠つて、筑紫下向中と僞り答へしめ

た。女院は泣く〳〵歸らんとしたまふ所に、和泉式部は上人御覽あれとや、くらきよりくらき道にぞ云々といふ一首の歌を詠じ、それを亂暴にも御坊の柱に書付けて去つたとありますが、それでは固より遙かに照らせの句が、少し打合はぬことになるのであります。

しかも性空上人は、後で此歌を見て心を動かされました。さうして急いで貴女の一行を喚還し、親しく教化をしたとあります。それのみならず其折上人の示されたといふ歌があつて、不思議にも亦熊野の伏拜に於ける靈神の御返歌と、似通うた所があるのであります。

二つ無く三つ無き法と說く故に　五つの障りあらじとぞ思ふ

書寫上人は學問は長處で無く、まして歌人の名は無かつたのですから、此程度の歌があつても恠むには足りませんが、是は又餘りに後世の口合ひの樣でありました。即ち佛法は唯一で、之を無二亦無三と經文にも說いてはありますが、その二と三とを合せて、五障といふ下の句に引掛けるなどは、眞面目で無いのみならず、爰には必要の無いことでありました。

即ち暗きよりの名歌が書寫山上の作で無かつた如く、後の歌も斯んな場合に相應したものでは無かつたらうと思ひます。女が天然の故障多き爲に、無上道に値遇することが難いといふ歎きは、日本の佛敎文學の古い樣式であつて、現に越前の越智山では泰澄大師の御母、紀州高野山では弘法大師の御母も、同じ悲みの爲に足摺をした跡を遺して居ます。さうして終に我子の法力に因つて、扶け濟はれたといふことになつて居るのです。それを書寫の靈山に限つては、便宜上和泉式部にして傳へて居たものでは無いかと思ひます。

南無藥師の歌

和泉式部は又突如として、日向國に生活の痕を留めて居ります。今の宮崎縣兒湯郡都於

郡村大字鹿野田（カノダ）といふ部落では、氷室山の腰に式部塚があり、近い頃まで三月の三日を此人の忌日として祭つて居ました。山を隔てゝ北鄕の幸納（ユキノウ）の原田といふ舊家には、式部由來記と題する記錄を傳へて居て、彼女が惡疾にかゝづて此國法華嶽寺の藥師如來に祈請し、不思議に全快して都に上つたこと、それから再び日向に下つて、或年の三月三日、四十三歲を以て此地に歿したことを述べ、村に在る二三の遺跡と共に、至つて拙ない歌の若干を誌してあります。

どうして斯んな遠國に二回までも下つたかわかりませぬが、法華嶽寺の方の言ひ傳へでは、病平癒して京に還つたとあります故、墓所が麓の村に存在する爲には、再び來たと解する必要があつたのであります。三國名勝圖會、日向案內記を始として、此地方の故事を說くほどの書物は、皆少なくとも法華嶽寺の藥師堂の、古傳だけは信用して居ますが、しかも此の世の中で一番不愉快な病氣に罹つた旅の婦人が、和泉式部に相違ないといふ根據は、實は此靈地が同じく性空上人の巡錫であつたとゝ、第二にはこの婦人が歌を詠んだといふことの他には無いのでした。寺の寶物には式部の携へて來た琵琶がありますが、それは却つて人ちがひの疑を、深くする材料といふに過ぎませんでした。

性空上人の足跡は成程九州にあります。筑前の背振山、日向の霧島等で修行をせられたことは古い傳記にも見え、法華嶽の藥師樣も上人の御本尊だつたといふ說は、些かも矛盾は無いのですが、たゞそれ故に和泉式部が此地へ來合せたとすると、少し勘定が合はなくなります。上人は書寫山に四十年餘り居られて、霧島を出られたのは其より以前の事でありました。しかも他の一方に上東門院の御在世、卽ち式部の壯年時代は、書寫の上人の極老の際に當るのであります。

それから次には歌の方ですが、是も亦寧ろ和泉式部で無いといふ證據として用立ちます。話ですから一應述べて見ますが、此山は昔傳敎大師が、十萬部の法華經を埋めたとも謂ひ、或ば山に黃金があるとも申して、本尊の如來は三河の鳳來寺、越後の米山と合ぜて、日本三藥師の一でありました。和泉式部難病の瘡を患ひ、淸水觀音の御告に基いて、三藥師を

巡禮して此御山に百日の參籠をしましたけれど、何の效驗も無いので斯んな歌を詠んだと謂ひます。

南無藥師諸病疾除の願立てゝ　身より佛の名こそ惜しけれ

意味は大凡推測が出來ますが、驚くべき無理な言ひ方であります。藥師は本來御名が示す如く、衆生の病を癒すといふ御誓願であるのに、斯くまで禱る私の惡疾を、御治療も出來ぬとならば御名譽にかゝはりますといふので、身よりとあるのは「私の名譽よりも」といふ積りらしいのです。脅迫ともいや味とも何とも言はれぬ亂暴な歌でしたが、それでも如來は克明に、やはり夢の裡に返歌をなされたと申して居ます。

村雨はたゞ一ときのものぞかし　おのがみのかさそこに脱ぎおけ

とあつて、忽ち平癒したといふのですが、是なども亦佛樣らしくない一種の秀句で、身のかさを簑笠ともぢり、それをいふ爲に村雨などを引合ひに出された。いつその事默つて全快させられた方が、遙かに氣がきいて居るのですが、如何いふものか昔の人たちは、斯んな歌のやうなものゝ添へてある話を、一層有難いやうに感じて居りました。

或は小野小町とも

美しい歌人の名譽の爲に、斯んな言ひ傳へは早く嘘だときまつてくれるとよいのですが、驚いたことには關東地方にも、群馬縣の南部に之と同じ話があつて、藥師御夢想の歌の村雨を夕立とし、作者の和泉式部を小野小町とするばかりで、他は寸分ちがはぬ贈答のへぼ歌が殘つて居ます。

和泉式部も曾て此國へ來たことがあると謂つて、現に總社の或寺には謎のやうな歌を傳へて居るのですが、一方の藥師の在る甘樂郡の村では、地名が小野鄕である故に、小野篁

或は小野小町とも

が通行し又小野小町が來て滯在しました。今の前田利定さんの先祖の寺、小野の德成寺には小町の木像が安置してありました。毎年七月七日の朝は、顏隱しの霧と稱して今でも霧が立つと申します。小町は世にも情無い難病に罹り、此地の藥師に祈願の歩を運んだけれどもどうしても治らぬので、例の佛を嘲るやうな歌を詠むと、御返歌があつて直ちに平癒したと稱し、其故跡として鹽燒水といふ御手洗の靈水があります。御禮の爲に鹽千俵を奉納して供養したので、今に其水に鹽の味があるなどと謂ひました。鹽は此地方では昔から、旅人の運んで來たものでした。足利時代の終に此附近に住んで居た高田氏といふ武士は、自ら源三位頼政の後裔と稱したにも拘らず、人が鹽賣の子だと輕蔑した話が、上野志といふ本に見えて居ます。此泉の水と關聯して、何か意味があるかも知れぬと思ひます。

伊豫では松山の近くの小野村北梅本に、五十年餘り前まで小野山梅元寺があつて、御本尊を小野藥師と呼んで居ましたが、爰へも同じ話がちやんと出かけていつて附いて居りました。小町は住吉明神の御告を蒙り百日の參籠をして、病氣平癒を禱りますと、滿願の日に斯んな歌を得て忽ち全快したと申します。

春雨の降ると見えしが晴れにけり　そのみのかさをそこに脱ぎおけ

それから三年の間此寺に寓居して、新たに靈像を刻して御頭の中に其歌を納めたと傳へて居るのは、珍しい歴史でありました。

神佛の御詠といふ三十一字は、代々の撰集の中にも段々ありますが、御夢想と謂つても自問自答のやうなもので、第一次の聽き手が人に語らぬ限りは、世間で知る譯が無いのですから、文學としてはやはり人間に屬し、巧拙の責任は固より藥師如來には無かつたのです。それと同じ理由から、文藝に點の甘い後世の話好きは、三十六歌仙に算へるやうな女詩人たちにも、次第に粗末な歌をよませるやうにしたので、前に掲げた南無藥師の歌の如きは、以前は到底和泉式部の作だと申しても、誰も承知をする者は無かつたのです。安樂庵策傳の醒睡笑といふ話の集は、今から三百年ほど前の寛永五年に世の中へ出た書物ですが、其中には次のやうに書いてあります。

或は小野小町とも

山門北谷に兒(ちご)あり、惡瘡のいたはりに根本中堂へ參籠す。七日滿ずれどもあへて效無し。打恨みて下向に短冊を内陣へ投入れ參らせたり。

南無藥師衆病悉除の願ならば　身より佛の名こそ惜けれ

卽ち内陣に御聲ありて、

村雨の降るとは見えて晴れにけり　其みのかさをそこにぬぎおけ

本坊に還れば瘡皆痕無し。

歌と信仰と

京都の近くでは旣に足利時代の末頃から、叡山に住む少年の惡戯半分の歌と傳へて居たものを、伊豫と日向と上野の田舍では、それから百五十年も二百年も後まで、小町や和泉式部の名歌の德の如く、語り傳へて居たのはどうしたわけでしようか。人によると此話の世に現はれた前後を見て、後の者が前のを盜んで來たやうに、速斷する御方も無いとは言えませぬが、假に其樣な不正直な者が地方にもあつたとしても、果して醒睡笑などの兒の歌を、小野小町に押付けるだけの勇氣がありましようか。さうで無くとも全國に何箇所も、同じ言ひ傳へのあることを知つて居たら、新たに斯んな話を始める張合ひは無かつた筈で、書いた物の古くからあることは、寧ろ傳說の分布のそれよりも更に前であつたことを、想像せしめる位であります。

勿論是だけよく似た藥師如來の靈驗談が、各箇獨立して發生したと言ひ得る者は一人もありますまい。最初は必ず運搬者があつて甲から乙へ、若くは共同の泉から汲んで行つたものと思ひますが、それが紙に書かれ本に爲つて、移動して居たとは考へることが出來ません。中世の農村生活では、文字の入用は少しも無く、又學びたくとも方法がありません

でした。僧侶の如きも學問をする爲には、中央に近い大寺に入らねばならず、其他は御經の句を暗誦して居たのであります。其故に手紙でも證文でも、書いたものが尊く見えた代りには、書いて殘したゞけでは傳說は發生することが出來ませんでした。土地の住民の誰に尋ねても、其通りと答へるやうな話は、少なくとも皆が集まつて一緒に聽く機會の何遍かあつたもので、それには相應な仲立が入用でありました。

そこで此の南無藥師の場合を想像して見ますのに、始めて此話を持つて來て栽ゑたのは、第一には澤山に旅をして、人のまだ知らぬ事を知つて居た人でなければなりませぬ。それから話し上手であり、又一向に學問は無い人で、名歌とは如何なるものかといふことに、格別深い考慮を拂はぬくせに、神と人とを動かす歌の力だけを、十分認めて居る者なることを必要としました。是は或は無理な注文の如く見えましようが、日本でもつひ近い頃まで、此條件を具備した人が、幾らでも村をあるいて居ました。旅人ながら前途を急がず、神佛巡拜に托して片田舍にも入込み、便宜があるときは永く一地に滯在しました。彼等が村人に親み近よる方法は、普通には物語をすることで、單に廣い世間の珍しい出來事を說くだけでも、もう耳を傾ける者が多かつたのに、それに佛法の敎を淺々と潤色して、悲しむ者を慰め、迷ふ者をさそひました。さうして少しでも信仰の萠しが見えますと、少しづつは祈禱や卜占の術を施したのであります。其中でも和讃とか繪解きとか、門毎に立つて佳い聲で物語をした者には、早くから女性が多かつたやうです。さうして又女だけに、やはり昔の旅の上蔦の、辛苦や哀情や神佛の因緣を、歌言葉を以て說き立てたと見えまして、時としては語り手と題目とを混同したやうな記憶が、そちこちに散亂して居るのであります。

旅の歌うたひ

今まで皆様は注意せられたことも無いであらうが、歌をうたひつゝ旅行をした婦人は、幾通りもあつてそれ〴〵系統を具へて居ました。記錄の類が乏しい故に追々に忘れて行きますが、現在はまだ老人たちに尋ねて見れば、少しづゝは知ることが出來ます。關東の田舍で最近まで確かに殘つて居たものは、ゴゼと名づけた盲目の女性であります。是は三味線を彈いて門附をして居ました。必ず下越後の方から來るやうに、東京附近では謂つて居ましたが、それは事實で無くとも少くも毎年一定の季節だけに、遠くから遣つて來る旅の者ではありました。顔馴染があつて普通の農民の家に、三日も五日も宿をして泊めて居たのは、單なる物ずきでは無くて何か古くからの、慣例があつたものと思はれます。夜分になると村の若者たち、ゴゼの泊つて居る家に遊びに來て、歌をうたはせたり笑ひ話をしたり、少々は又みだりがましい事もありました。

ゴゼといふ語は或人々が想像する如く、決して瞽女といふ漢語の誤つた發音ではありませぬ。やはり靜御前や巴御前の御前と同じく、知らぬ女に對する敬稱であります。今日のオマへ、昔のワゴゼなどと共に、男にも適用して差支無いやうですが、母ゴゼ、母ゴといふ言葉はあつて、父ゴゼと謂はなかつたことを考へると、以前は女に限られて居たのであります。乞食に近い者に御前はをかしいけれども、ジヤウラウ(上臈)といふ語が今では或種の女のみを指すやうに、彼等の社會上の地位は本來はずつと良かつたことを意味するのであります。

信州の諏訪松本、其他二三の地方には、近い頃まで瞽女に關する法制がありました。彼等の境遇は男の盲人と、よく似て居まして、仲間には頭目があり、又繩張があり、一定の區域内では祝儀とか法事とか、又は盆彼岸などの日に、家々を廻つて施しを受ける代りに、他所から遣つて來る同職者を取締り、又配下のゴゼの不法不身持を戒めました。しかも獨占の恩惠を受けた者よりは、實際生きねばならぬ盲女の數の方がいつでも多い爲に、その餘分の者だけは、やはり方々を漂泊して、あるくことになつたのであります。

現在は按摩より他には、目の見えぬ婦人の職業は無い樣になりましたが、それでも東北

に行くとイタコ、モリコ又はオカミンなどと名づけて、餘り遠くまでは行きませんが、人に頼まれて占ひ祈禱神寄せの如き、法令の認めぬ宗教行爲に携はる者が殘つて居り、また少しづつ弟子を養成して居ります。此人たちと越後から來るゴゼの坊と、相類する點は段々少なくなりますが、イタコも青森縣あたりでは、年に三度のオシラ神の神遊びの日に招かれて來て、古い物語の歌をうたひますし、ゴゼも以前は單なる遊藝人として、流行の小唄ばかりを歌つては居なかつたので、三味線などいふ樂器の入つて來たよりも、此職業の方が遙かに古くからあつたのであります。東上總の茂原附近の村に行つて見ますと、岡の麓に「禮の御前」といふ珍しい小字があつて、小さな堂の址がありました。伊勢や大山の御師のやうに、ゴゼが毎年此へ來て暫らくは滯在したことを、語るものかと思ひました。

但し斯うして廻つて來る歌ひ女は、必ずしも常に盲目ではありませんでした。加賀の小松附近などでは女萬歳と稱し、どこかさう遠くない處から毎年新しいクドキといふ長い歌を作つて、歌つて來る者がありました。中國地方でも何と呼んだか記憶しませんが、一つとせえ節などは大抵斯ういふ女の群が歌つて來たものです。

熊野比丘尼

和泉式部の歌物語の、諸國に分布するに至つた原因を尋ねて見る爲には、是非共ごく簡單になりとも、歌比丘尼といふ旅人の事を說かねばなりませぬ。歌比丘尼の大きな城下や湊に住んだ者は、早くから遊女同前の生活をして居まして、墮落の末は禁制を受けて無くなつてしまひましたが、村に入つてはそんな職業の成立たう筈も無く、又一生さうしても居られぬわけですから、必ず別に相當の活計はあつたことゝ思ひますが、今日殘つて居る記錄は、主として都會地のものである爲に、文庫の中でばかり學問をしようとする者は、時

時誤つた判斷をする懸念があります。

歌比丘尼の手に持つ樂器は、四つ竹やビンザサラのやうな簡單なものだけで、瞽女のやうに三味線は用ゐませんでした。街道の茶屋に出て往來の客を相手にした者は、既に江戸時代の始頃から、丹前とか柴垣節とかの流行唄を口にしたといふことが、淺井了意の東海道名所記にも見えて居ますが、それは悲しむべき古風の破壞だと、著者も評して居ります。そんなら本業は何であつたかといふと、繪解きと稱して地獄變相の繪卷などを、携へた箱の中から取出し、佛法の敎を世話に和げて說明することで、繪を指し又は塵を拂ふ爲でありましたか、必ず手には雉子の尾羽を持つて居りました。大家の內方などの世間を知らず親を失ひ子に先立たれて、獨りで憂ひ悲しんで居る人たちを訪れて、繪に由つてしみ〴〵と涙を催すやうな物語をして聽かせ、自然に後生菩提の道に引入れたと謂つて居りますが、勿論いつでも地獄の繪卷ばかりを、見せてあるいたわけでもありますまい。三十二番の職人盡歌合を見ますと、鎌倉時代からもう繪解きといふ婦人がありまして、手にはちやんと雉子の尾羽を持つて居ります。さうして又琵琶を抱へて居る所を見ますと、後々の平家法師のやうに、其話は節を附けて暗誦したらしいのであります。此繪解き女が頭の髮を垂れて居るのは、或は歌比丘尼とは別の樣にも考へさせますが、比丘尼と謂つても以前はそぎ尼で、近世の樣に剃り丸めては居なかつたのであります。

歌比丘尼の本國は熊野であつたと申します。中には旅先で弟子を取り、又は町中に住居を定めた者も多かつたやうですが、少なくとも年に一度は、還ると謂つて熊野に往復しました。媚をひさぐ樣な境遇に落ちた比丘尼までが、熊野の牛王札を賣ると稱して男の中に出入し、箱には酢貝といふ貝殼を入れて、土產と名づけて得意の家へ贈つたことが、西鶴の小說などにあります。どうして熊野にばかり、此樣な特殊な職業婦人を澤山に產するに至つたかは六つかしい問題ですが、本來此の偏卑な土地の信仰が、一時日本の隅々までも普及したのは、最初から神人の旅行といふことが要素であつたからで、永く其狀態を續けて居れば、後には故鄕に不用なる人が多くなり、何としてなりとも外で生計を立てることが

必要になつたことかと思ひます。

多くの熊野比丘尼には配偶者があつて、大抵は修驗者でありました。女の供給に由つて一山富むとさへ謂つて居ますが、彼等が正當の收入も遊藝の報酬では無く、普通には勸進と稱して、人に喜捨を勸めたのであります。神の社、佛の堂、それから橋や山道の改修迄も勸進し、後には伊勢の神宮の地にも來て住んで、或時には大廟造營の爲にも働いて居ます。斯ういふ目的の比丘尼たちが國々をあるく場合に、歌にして聽かせた物語の種類が、二種や二種に限られて居なかつたのは、寧ろ當然のことかと思ひます。

淨瑠璃の根原

旅の女性のさま〴〵な歌物語を運んであるいた者に、ゴゼとか歌比丘尼とか、時代によつて澤山の種類のあつたことゝ、彼等は女だけにどうしても女の話を、餘計に知つて居たといふ事は大抵想像が出來ても、まだそれだけでは説明の付かぬのは、話の和泉式部がちやんと行く先々に遺跡遺物を留めて居ること、少し固くるしい言葉で言ふならば、説話が傳説の形を以て、保存せられて居ることであります。

これは一つには附近の土地に、何か因緣の殘つて居る場合で無いと、物語が早く忘却せられ易かつたこと、即ち幾つと無き物語の中で、比較的傳説化する傾きのあるもののみが、今日まで消えずに居たのだと見ることが出來ます。例へば同じ佛菩薩の靈驗を説いた話でも、山に藥師を安置した麓の村では、如來に禱つて難病が快癒したといふ奇談だけが、殊に繰返して語られるといふ類であります。和泉式部の話をよく知つて居た比丘尼が、死んで其地に葬られ、若くは暫らく住んで居たといふ場合に、後々その故迹が式部の塚となり式部屋敷と誤解せられることは、有りがちであつたらうと思ひます。

それも話が律語の形を取つて居なかつたら、さう何遍も一つ事を聽くわけはありますまいが、歌は內容よりも聲や樣式が面白いので、御箱のやうになつて又しても所望され、末には生きて居るうちから顏を見れば思ひ出し、旣に一種の傳說の如くなつて居たかも知れません。其上に歌は報告の如く筋道がはつきりせず、且つ屢々主人公の聲になつて物を言ふ部分がある爲に、どうしても混同が起り易かつた。今でも淨瑠璃などで聽衆の泣くのは、よく注意して見ると、必ず太夫が千松になり初菊になり、作り聲で何か言ふ處であつて、折角說明の名文句があつても、その間は默つて待つて居るのであります。

實際又それが物語の最初からの效果でもありました。單なる噂で無しに肝要な部分は、語り手が本人に化けてしまふ故に、始めて普通人は當時其場に居合せたやうな、强い感動を起すので、言はゞ最初から混亂を生ずるやうに、仕組まれて居たと申してもよろしい。

淨瑠璃の根元と稱する所謂十二段の冊子を讀んで見ると、あでやかな詞が段々に、永い歲月の間に積み重ねられたことがよくわかり、中々一人の才女が筆を執つて、一氣に書上げたといふやうな纏まつた作品ではありません。もとは多分鳳來寺の御本尊の、あらたかな靈驗を說くのが目的で、藥師如來の申し子なるが故に、御名を淨瑠璃御前と謂ひ、珠にも花にも譬へやうの無い美しい姬で、人間の福德榮華何一つとして缺けた所の無かつたことを、事も細かに叙べ立てゝ居たのが、空想は更に空想を產んで、末には牛若御曹司の海道下りと、結び合ふことになつたと思はれますが、しかも其以前から又と此世に無いやうな尊い聟が此姬に懸想し、幾多の危難と障碍の後に、めでたく廻り合うたといふ一條だけは、もう出來て居たらしいのであります。誰が考へてもそれが作り物語であつたことは、疑の餘地は無いにも拘らず、矢矧川以東の處々の村里では、今でもまだ人の信ずる傳說であつて、前にも言つたやうな故跡が多く在り、その中には時が至つて新しくて、菴室と稱するものゝ石垣などさへ、稀には殘つて居る處もあつたのであります。

遊行女婦

斯ういふ物の序で無いと、御話をする折も無いやうな問題ですが、昔の人たちの心持では、熊野比丘尼の如き境遇に在る婦人は、特に墮落する迄も無く之を遊女と名づけて些しも差支が無かつたのであります。遊女といふ語には本來は賣春といふ意味はありませんでした。萬葉集の頃には之を遊行女婦と名づけて居まして、九州から瀨戸内海の處々の船着き、それから北は越中の國府あたりにも、此者が來て居て歌を詠んだ話が殘つて居ます。其名稱の基く所は、例の藤澤寺の遊行上人などの遊行も同じで、所謂一所不住で、次から次へ旅をして居る女と謂ふに過ぎませぬ。日本の語に直してうかれ女と申したのも、今日の俗語の浮かれるといふのとは違ひ、單に漂泊して定まつた住所の無いことです。後に之を「あそび」と謂つたのは、言はば一種のしやれの如きもので、遊といふ漢字が一方には又音樂の演奏をも意味し、遊女が通例其「あそび」に長じて居た爲に、わざと本の意を離れて斯うも呼んだものかと考へます。

勿論漂泊してあるく樣な女ですから若くて美しい間は人に挑まれる事も屢々あつた筈ですが、それは寧ろ自然の結果といふ迄で、今日の如く最初から其目的で、入つて行く樣な者は無かつたのです。身賣といふことも無かつた代りには、受け出されるといふことも無いので、年老い容色の衰へた後まで、依然として同じ境遇に居なければならなかつた以上は、別に何かもつと組織だつた職業が必要であつたのです。舞女又は白拍子と名づけて、舞ひつゝ歌ふ一群も後は盛んになり、或は木で作つた人形を舞はした傀儡師（クゞツ）といふ部類もあつたやうですが、遊行女婦の時代には歌を主とし、扇か何かで簡單に拍子を取り、單に語り事の面白さを以て、人の耳を悦ばせた者が多いのでありました。彼等の歌と

して今日まで傳はつて居るものは、今様といふ類の氣の利いた短い文句ばかりで、定めし佳い聲と美しい節とを以て、消え難い印象を留め、次々之を學んで繰返す者の多かつたから殘つたのかと思ひますが、その跡先には恐らくは色々の物語が附いて居て、兼て其歌謠の感動を深める爲に、下染を爲して居たことは、今ある切れ〳〵の記錄だけからでも、之を想像することが出來るので、果して其想像の通りならば、中世以後の繪解き歌比丘尼が、却つて上代の遊女といふもの〻、正統を傳へて居ると申してよいのであります。

そこでもう一歩を進めて考へて見るべきことは、昔の遊女が口ずさんで居た歌であります。此節の所謂花柳界の歌は、長いのも短いのも十中の八九迄、人情といふか痴情といふか、子供や年寄には興味も無い一つ事を、たゞ好い聲で歌つて居るのに反して、昔の漂泊の女の歌には、もつと一般的の興味がありました。「君を始めて見る時は」と謂つても、次の句は「千代も經ぬべし姫小松」とありまして、つまりはめでたい祝の歌であります。梁塵秘抄や郢曲の集を、御覽になつてもよくわかります。

勿論聽く人の之を悦んだ爲もありますが、つまり此人々の本來の職分が酒とか放蕩とかと直接の關係は無く、弘く地方々々の老若男女に向つて、所謂讃佛乘の因緣ともなるべき、珍しい言葉物語を選ぶことを主として居た結果であります。社會學の研究者などは、屢々昔の巫女の娼女であつたことを說きますが、實はそれでは言ひ樣が惡いので、寧ろ遊女がもと巫女の一種であつたのです。濫用の弊を生じた點は酒とよく似て居ります。

小野のお通

三州鳳來寺の藥師如來は、中古久しい年代に亘つて、海道一帶の信仰を支配して居たやうであります。弘く信徒の家々を廻つて、佛德を禮讃してあるく職業が、若し職業として

成立ち得たとすれば、即ち「淨瑠璃」語りといふ名稱の、傳はつて今日に至つたのも不思議で無く、一方には昔の女の語り手と、物語の主人公とが時々混同したとも、誤りながらも原因はあるので、必ずしも最初から欺くつもりで、知りつゝ虚僞を說いたものと、解するには及ばぬのであります。

但し以前の世の語り人は、自身も亦一箇の信者でありました。決して我々のラヂオや蓄音機の如く、歌を取次ぐだけの器械ではなかつたのです。故に時々神佛に代り、又は古人に代つて一人稱で物を言ふときには、其の感情は眞卒なる聽衆を動かし、いよ〳〵彼と此との混同を誘ふことが、多かつたのかと思ひます。今でも田舍では時折見かけるやうに、中陰や彼岸の祭の日に招かれて、死者に代つて物を言ふ口寄せ又は「たゝきみこ」といふ婦人が、さうして居る間だけは信用せられ、假令迂散くさい旅の者であつても、袖や袂に取縋られ泣かれたのも、つまりは御互ひに此形式を以てすれば、亡き人が再び現れると信じて居た、古い時からの習はしの爲で、後世稍別途の鑑賞に引張られて、異常の發達を遂げた淨瑠璃といふ文學も、根原に於ては正しく是と一つであつたのです。

口寄せの文句にも早くからきまつて居た部分と、次々潤飾するものとがあつた如く、淨瑠璃の古曲にも前後色々の歌ひ手の協力があつたことは、讀んで居るうちによくわかります。小野氏お通が單に其中の、有名なる一人に過ぎなかつたのを、いつと無く全部此人の創作の如く言ひ始めたのも、亦一種の傳說かと思はれます。若しさうだとすれば、是にもまだ隱れたる色々の意味がなければなりませぬ。

日本には五つか六つばかり、非常によく全國を移住してあるいた家筋といふものがありますが、小野氏などもその一つでありました。此一族からは珍しく文才に長じた女性が出て居つて、現に小野小町の如きも著しい例ではありますが、是は算へきれぬほど澤山の墓所と生地とを傳へて居るのを見ると、一人しかなかつたわけではあるまいといふ說が、古くから唱へられて居ます。多分はやはり中世以來の旅の女が、盛に小町を說いて後に混同した結果かも知れぬが、是には大抵小野姓の舊家が附近にあつて、其傳說に參與して居た

ことは、恰かも平家が來て隱れたといふ山間の村に、小松といふ苗字の殘つて居るのと同じであります。

だから格別意外でも無いが、小野の通女にも到底兩立を許さぬ種々な傳說が傳はつて居るので、是にもやはり同じ名の人が、二人以上あつたことを推定せしめます。例へば劍道の名人小野次郎右衞門に小野の家名を讓つたり、洛東しる谷の小野寺、小野小町の艶書を以て作つたといふ玉章の地藏を再興したり、又娘に招かれて信州の松代に下る路で、

姨捨の山には入らじ名をきゝて　車をかへす人もこそあれ

といふ歌を詠じたのが、共に寛永前後の事とすれば、織田信長の侍女として、十二段の物語を作つて盲人に歌はしめたといふお通女とは年代が合はぬ。其上に「じやうるり」を歌ふといふことは、信長の生れるよりもまた大分以前の書物に、もうちやんと見えて居るのであります。小野といふ苗字、またお通といふ名前が何か此樣な風說をさそふだけの、一種の力を持つて居たのであるまいかと考へて見るべき事情はたしかにあります。

文ひろげの狂女

小野のお通といふ才女が、どうも一人では無かつたらしいといふ推測を、よほど有力に裏書する一事實は、同じ頃作州の津山の町から遠くない押入といふ村に、更に尙一人の同名の婦人があつて、それは信長の侍女でも無ければ、又東福門院にも北の政所にも仕へては居なかつた、丸々の別人であつたといふことであります。

此お通を出したのは岸本といふ舊家で、母が小野氏であつた爲に、斯う呼ばれて居るのだと說明せられ、又お通といふ名の方は、何か此女性の不思議な靈力と、關係があつたらしく見られるのであります。誠に浮いた話ながら、少なくとも百五十年の間、其家では牢

く之を信じて居たので、山本北山が書いた堂々たる碑文が、村の鎭守天神社の境内に建つて居ます。世に優れた美人にして學問を好み、五つの歳から和歌を詠みました。一旦親の約束に基いて、京都の富豪に緣に付いて祝言の式を終り、もう是で約束だけは果したからと言つて、其夜のうちに四十里も隔たつた美作の家に還つて來たので、父母兄弟が始めて神通の有ることを知つたとあります。それから追々に祈禱まじなひを賴みに來る者が多くなり、終に故郷を辭して國々を巡り、十八の年には再び京都に來て居ました。それが元和の五年、卽ち後水尾天皇の御治世なかばの事になるのですが、信じ難い話には、ちようど其頃天子樣が御不例で、宮中に召されて占ひを試みると、御病は龍蛇の祟りであり、十二の壇每に水桶を置き、金銀の幣を立て香を焚いて修法をすると、果して桶の水が湧き上つて、其中には小蛇が咬み合つて死んで居て、忽ちにして御惱は平癒したと申します。叡感の餘りに御手づからの御筆を以て、白神大明神といふ神號を賜はり、しかも其儘に御側に仕へ申すことになつたなどと謂ふのであります。

勿論其樣な事があつたら、必ず朝家にも記錄があるべきですが、それ迄は研究せられてありませぬ。通女が程も無く宮殿の生活を厭うて、嵯峨の山に入つて庵を結び、御使が搜しあて〻漸く尋ねて來た時には、

求めなよ花も紅葉もをのづから　慕ふ心の中にこそあれ

の一首を殘して、もう何れへか行き隱れて居たと謂ひ、それから後は愈々通力が加はつて、峯から峰づたひに、深山を鳥獸の如く遊んで居たと謂ふのですが、どういふものかやはり再び還つて來て、二十九歳の寬永七年の九月十三日に、

いつ迄か散らで盛りの花はあらん　今はうき世を秋のもみぢ葉

といふ辭世を詠んで病歿したと稱し、故郷の村に塚と祠があるのです。

此事實は眞僞如何といふよりも、近世に入つて迄小野お通といふ婦人を、斯んな目を以て看る者のあつたのは何故か、といふ問題を提出してくれるのであります。學者は未だ注意をしませんが、畸人傳などに載せてある文ひろげの狂女千代、卽ち都の五條の橋の上に

立つて、路を行く人を喚び留め、大きな聲で手紙の文を繰返し〳〵讀んだといふ者が、小野のお通の下女であつたと謂ひ、お通が美濃の岐阜から書いてよこした手紙を、ひろげて讀んだのだと言ひ傳へて居る事は、或は此淨瑠璃文人の神仙味、若くは女には珍しい漂泊性、殊に前代の歌謠文學の下に潜んで居た宗教的分子と、何か關係のあつたものではありますまいか。

近頃復活させた戀想文といふものは、京都では辻占の一種であり、桂女といふ一種の職業婦人が、昔は之に參與して居ました。橋では一條と五條とが、殊に道路で占ひをする場所になつて居ました。さうした狂女といふのは、實は只の婦人の言はぬことを、言ひ得る女を意味して居たのであります。

話の泉

問題が京都へ戻つて來た序を以て、今一度誓願寺と和泉式部との關係を考へて見たいと思ひます。自分の推定では國々の峰の藥師に「其みのかさを」といふ類の和歌を假托しようとした人たちが、京へ還ると此誓願寺の中に入つて住むのが、或時代の習はしであつた爲に、和泉式部との因緣が次第に濃厚を加へたのでは無いかと思つて居ますが、何度も盛衰があつて寺の樣子がかはり、其上に古い記錄が燒けたので、よほど之を證明することが困難になりました。

併し源の同じかるべき歌話が、是ほど弘く西東に分布したのは、到底或一人の根氣又は

長命の爲でなかつたとすれば、何處かに中央の交換所の如きものが無ければなりません。必ずしも誓願寺ならずとも、折々立寄つて汲んで行く話の泉が、都の中に一處はあつたかも知れず、それと此御寺との間に、何か宗教の方から緣故があつたとしても、それは無理な想像では無いのであります。

其關係の今にはつきりと分かるまで、注意して置きたい點が二つだけあります。一つは前にも引いた醒睡笑即ち南無藥師に怨みを述べた歌を、比叡山の北谷の兒の作とした話の本が、誓願寺に關係のあつた策傳といふ隱居僧の作であることです。其自序といふものを見ると、策傳は齡七十といふ年に、此寺の乾の隅に安樂庵といふ隱居所を建てゝ住む事になつてから、以前書き留めてあつたものを整理して、八卷の書物にしたと謂ひ、終に添へてある板倉侍從あての寛永五年の手紙には、前誓願安樂庵とあつて、久しく此寺内の竹林院の住僧であつたのです。年を算へて見ると、誓願寺が火災にかゝつて、一條の小川から今の地へ引移つて再建した頃には、もう此人は三十前後でありました。さうして序文には小僧の時から、耳に觸れて面白くをかしかつたことを、元和八年といふ年に書いたとありますが、それが六十三四の頃で、即ち小野お通の時代と大よそ同じであります。

次には醒睡笑數百篇の笑話の中にも、やはり誓願寺の話があります。例へばある文盲な男が參詣して、有名な南無阿彌陀佛の外陣の額を一見し、誓願寺ならば三字で無ければならぬのに、字が六つあるのはどうしたわけだと、不審をしたといふ一條などは幾分か宣傳のやうにもきこえる位で、普通の額には山號なり寺號なりを書くものであつたのに、此寺に限つてさうでないわけは、昔和泉式部の幽靈が、一遍上人の前に現れて、是非とも六字の名號にして貰ひたいと請求したからといふ話は、既に「誓願寺」と題する謠曲にも作られ、非常に有名な緣起の一箇條で、さういふとんまな疑を起す者、又は之に對してそれは「誓願寺との樣」と讀むのだと、知つたかぶりをする者なども無かつたことゝ思ひますが、どういふものか後々までも、是が落語などの中に殘つて居ました。

それから又曾呂利咄といふ話の集があります。有朋堂文庫では醒睡笑と合冊にしてあつ

て、是も昔から安樂庵の作と傳へられました。曾呂利といふのは後に附けた標題らしく、寧ろ他の一つに比べるとや〻生眞面目な歌の話が多く、曾呂利新左衞門頓作の逸話などはちつとも見えぬのですが、是には珍らしく和泉式部に關する記事が多く、殊に其傳記の一節とも見るべき保昌小式部との關係、三十五歳で發心して念佛往生を遂げたこと、京極三條の誠心院の墓と木像との事などが、詳しく書込んであり、其あとに誰の作とも知れぬ次のやうな狂歌がのせてあります。

なき跡のしるしの塚に立ちよりて　いづみしきみの花を手向くる

誓願寺の緣起

有名なる說話集錄者安樂庵策傳が多分は小僧の時から、誓願寺の住侶であつたこと〻、和泉式部が此寺に於て世を終つたといふ言ひ傳へとは、今まで知られなかつた深い關係のあるもの〻如く、私などは推測して居ります。寺が話の問屋だといふのは、或は皆さんには御不審かも知れぬが、昔は念佛門の方では組織が稍異樣であつて、一種半僧半俗の技藝の徒、以前の語では職人と稱した者を、久しく其寺內に保護して居ました。何阿彌と名乘つて家庭を持ち、常は扇を折るとか茶筌を作るとか、それ〴〵浮世の營みをして居ながら、群衆念佛の催しがある日ばかり、所謂御勤めに出役する者が多く居りました。一遍上人の藤澤の本寺なども、行く〴〵年萬によつて住職ともなるほどの、何々院や何々軒までが、もとはそれ〴〵の業體で渡世をして居ました。時衆と謂つたのは卽ちそんな人たちの事で、畢竟は百萬遍といふやうな莫大な數だけ、念佛を申す爲に、常から多くの人を抱へて居たので、其人々は生計の必要から、始終やはり旅行をして居たのであります。

誓願寺の寺中又は院內ともいふべき者は、主として比丘尼ではなかつたかと思ひます。

それは此寺と關聯して和泉式部等の、女性の話が多く傳はり、國々へ持ち運ばれて居たといふ外に、尙天正の末になつて暫く絶えて居た此寺を再興して、今の繁華の地に移し建てたといふ人が、或は豐臣秀吉の寵愛を得たと傳ふる、佐々木京極氏の女松丸殿であつたことも、之を想像せしめるのであります。今ある誠心院の尼姿の木像なども、其以前から在つたものでも無ささうで、事によるとその松丸殿のだらうかと思ひますが、さうで無くとも中頃にはそんな像を安置した動機、又移轉してから後にある樣な立派な石塔を建てたことを考へると、事實では無かつたにせよ、誰か和泉式部のやうな人との因緣が、一朝一夕の事では無かつたらしいのであります。

式部の墓と稱する大きな石塔には正和二年五月といふ文字が刻んでありました。鎌倉時代も終に近く、一遍上人の遷化より又二十何年も後の月日で、假に僞作とすれば此樣な中途半ぱな年號は使ふまいと思ひますから、それにも亦何か意味がありさうです。但し墓に刻した法名の誠心院智貞專惠は、近世になつて附けたものかといふ評判で、多分は木像の

厨子に書いてある智貞法尼の名と、日次記事などに記してある專惠法尼といふ和泉式部の戒名とを、組み合せて見たものと思ひますが、それにしたところが、斯んな比丘尼の名を二つまで、寺で大切に保存して居たといふのは偶然ではありません。何にせよ此寺には度度の火災があり、外部の記錄からはまだ誠心院の歷史を知ることが出來ぬので、是以上の想像を進めることが難いのであります。

前に申した誓願寺の古い方の緣起は、續群書類從の卷七百八十三にちやんと出て居ました。是には和泉式部の法名を專以と謂つてあるが、一條天皇の御治世としては、如何にも似つかはしからぬ固有名詞であります。此緣起は足利期の中頃に、諸人に歸依せられた當寺の上人、眞阿といふ僧の記事を以て終り、卽ちまだ誓願寺が一條小川に在つた頃に、出來たことだけは確かですが、總體に覺束ない話ばかり多く、殊に和泉式部の逸話の如きは、もう以前に比べて非常に成長し且つ豐富になつて居る事がわかります。しかも此女人の事績で略ぼ全篇の三分の一を占めて居るのを見ると、今日我々がをかしなものと考へる昔話

なども、意外に傳來は久しいものであつたので、同時に又それからどんな附加へがあつたかを知る爲にも、有用なる一資料であります。

法然上人との因緣

誓願寺の緣起を讀んで見ると、最初此寺と和泉式部とを結び付けたことが、實はさう手輕な仕事でなかつたやうに感じられる。餘程歷史に構はぬ人が言ひ出したと見えて、寺は天智天皇の御勅願で、以前奈良の附近に建立せられ、それから延曆三年の御遷都と同時に、山城の京へは引移つたことになつて居るが、第一に御本尊は阿彌陀樣であり、寺を今日の如き淨土宗西山派の四箇本寺の一にしたのは、あの派の祖師の法然房源空、その又御弟子の證空圓空等の諸上人で、一遍上人が六十萬人決定往生の札を出したのは、それから尙遙かに後代の事でありました。しかも他の一方では和泉式部は、その法然上人の生れるよりも百二十年前に、ちやんと念佛の功德に由つて、極樂に往生したと謂つて居るのであります。

つまりは和泉式部の方で、よほど氣永く待合せて居なければならなかつたのです。それでも緣起に書く位だから、あの頃の人は信ずることが出來たものと見えます。恐らくは此緣起の筆者が、始めて作り出した話ではありますまい。可なり無理な說明かと思ふが、「寺と女歌人との因緣は、ざつと次の樣に語り傳へて居るのであります。

和泉式部は三十五の年に、十四歲になる一人娘の小式部を失ひ、始めて人世の無常を感じて菩提の道を求め、同じ心の八人の宮女を誘うて、遙々と書寫山の上人を訪ねて行つた。さうして面會をことわられて、「くらきより」の一首を詠んだといふ迄は、前に御話申した三國傳記などと同じことであります。ところが性空は其名歌に感動して、遂つて詳しく話

を聽いてから、御身の望みは往生極樂の道である。自分も西方の行業を兼修じては居るが、本意とする所は一實の觀解であつて、彌陀敎の方は未だ自分にも分明せぬ。男山の八幡大菩薩は本地阿彌陀佛だから、彼處へ參詣して御願ひ申すに限ると謂つて、敎化をしなかつたとなつて居ります。

それから其忠告に從つて石清水に參詣し、七日七夜の御通夜をしたとあります。さうすると八月なかばの月さやかなる明方に、八十ばかりの老翁の姿で、神が出現して御告げなされるには、誓願寺の御本尊こそは一日に一度づゝ、必ず西方淨土に往來して、衆生を引接したまふ尊い彌陀如來である。彼處へ參つて信心をせよと、又責任を御讓りなされた。そこで愈々最後の手段として、此寺に參籠すること四十八日、一心に念佛を續けて居ると、又滿願の夜の靜かなる燈の影に、阿彌陀如來は七十餘の老尼の姿をして、御佛壇から御降りなされて、今度はこまゝ〳〵とした御說法があつた。要するに彌陀の本願を賴んで一心に念佛せよとの、簡單な敎化に過ぎなかつたが、其終にやはり一首の歌を附加へて、深く此文句を心肝に納めよと示されたやうに書いてあります。

あみだ佛といふより外は津の國の　なにはのこともあしかりぬべし

大和物語の葦刈の歌の話を見た人には、改めて說明する必要も無いと思ふが、「なにはの事」とは何の事でもといふ意味で、なにはといふために津の國を枕詞とし、悪かりぬべしを難波の葦に引きかけた言葉の戯れでありました。

ところが面白いことには此歌は、百何十年の後に生れた法然上人の作であります。阿彌陀如來が豫め之を借用せられたのであります。誓願寺の緣起などは既に此事は熟知して居つて、此歌の脇に小さな文字で、次のやうな說明を書加へて居るのであります。

建久の比とかや。選擇集所製の後法然上人當寺へ參籠ましゝて、和泉式部此歌に感悟せしことを聞しめして、我所製の一卷、本尊の御詠歌に符合せりと、殊に感吟したまふとなん。

私の解釋では緣起の出來る前から、本尊が此歌を詠まれたといふ話が傳はつて居たのを、

既に法然の作と知つた以上は、其まゝ默つて書殘すわけにも行かなかつたのかと思つて居ます。

小式部の內侍

段々御話をして來た如く、和泉式部の物語はどこ迄も三十一文字を以て終始して居ますが、歌が必ずしも此人の名を不朽にした原因とも考へられぬのは、其中には明白に後世の作であり、又少しも作者の名譽にはなるまいと思ふもの、式部は單に其引合ひに出されたに過ぎぬ例が、幾らもあるからであります。つまり昔の人には話に歌をまじへる習慣が今よりも多く、歌のよしあしには關係無く、いつでもそれが昔話の興味を高めて居たらしいことを推測せしめるだけで、是非とも中心人物を和泉式部にしなければならぬ理由は、別に何か存在したものと、見るより他は無いのであります。

結局明瞭には解らぬのかも知れぬが、私は主として其點を考へて見ようとして居ます。和泉式部の逸話といふものには、餘程早くから知らず〳〵のおまけが加はつて居たらしく、現に勅撰集の中にすら、此人の作ではあるまいと思ふ歌があるのです。さういふ中世の誤謬の原因は、一方の近代に入つて始めて生じた傳說の原因と、果して略ぼ同じものであつたかどうか。若し同じとすれば日本の文學の歷史なども、今一度新しい燈の光をかゝげて、之を照して見る必要があるわけであります。其心持を以て今少しく此話を進めて見ましよう。

最初に考へて見たいのは小式部內侍の事であります。誓願寺の緣起には十四歲で死んだと謂ひ、一說には十八歲とも申しますが、兎に角に親まさりの天才であつて、その非凡なる文藻は夙に一代の名士をさへ驚かしたことは、かの「大江山いく野の路」の歌で有名になつてをります。母の和泉がその遺稿を見て深く歎いたといふ話と、

もろともに苔の下には朽ちずして　埋もれぬ名を見るぞ悲しき

といふ歌とは、最も自然なる史實として、九百何十年後の今日も、多くの人の同情を引付けることが出來ますが、實は斯ういふ種類の古い言ひ傳への、どの部分までが果してあつた事で、どこからさきが後々の假托かといふ境界は、まだ一向に不明なのであります。

例へば小式部が病篤くして、母の膝を枕にして息も絶々であつた時に、

いかにせん行くべき方もおもほえず　親に先だつ途を知らねば

といふ一首を口ずさむと、天井の上で欠伸をしたかと思ふやうな聲で、何者かが「あなあはれ」と謂つたといふ話などは、ちやんと古今著聞集の中にも出て居ますが、其話の上半分を信じて下半分を疑ふといふことは、隨分六つかしいことであります。それよりも考へて見てよいのは、記錄者の耳に此話が入るまで、如何なる路筋を通つて二百年近くを過ぎたかといふことであるが、今から見ると著聞集は古い書物である故に、先づ信じて置くより他は無いのであります。

誓願寺緣起などにも、和泉式部發心の因緣として、やはり此歌のあはれを說いて居ります。即ち天井の上に居た鬼か何かゞ、欠伸を止めて歎息をしたといふ部分は拔いてありますが、其代りに母の式部が之を聽いて涙ながらに、

小足にてたどり行くらんしでの山　路知らぬとて還り來よかし

といふ一首を詠んだけれども、人の定命は如何ともし難く、終に十四歳を一期として死んでしまつたとあるのであります。

ところが此歌などは、何としても理窟に合ひません。「路知らぬとて」の文法のちがひは後に語つた人の記憶の誤りだとしても、十四歳の娘に小足にてはをかしく、殊にまだ生き居るうちに、辿り行くらん死出の山はひどい。察するに是は誰か幼少の子を失うた親が、悲みの餘りに詠んだ歌であつたのを、又々和泉式部に持つて來てくつ附けたもので、それといふのが二人の歌よみが相對して居るからには、一方に歌があつて一方が默つて居たと言つては、話にも何にもならなかつた爲であらうと思ひます。

母と子の歌

近世の昔話に於ては、和泉式部親子が往々にして歌の應答をして居ります。さうしていつでも娘の方の歌が、一歩立勝つて居たやうに謂ふのであります。全體母より尙上手な小式部といふ歌人が、果してあつたのだらうか。斯んな事迄疑つて居ると申しては、或は考へ過ぎとも見えましようが、餘りに弘く子の方が親よりえらかつたといふことが、國々の話に附いてまはつて居るのであります。私はそれを是からぼつ〳〵と説明して見ます。

曾呂利狂歌咄が同じく誓願寺の近所から出たらしいことは、前に申しておきました。其一節に、和泉式部は歌の道に名を得た者で、或時斯ういふ歌を詠んだ。

人はたゞ飽かれぬうちに世を出でよ　なさけの有るを思ひ出にして

娘の小式部が之を聽いて、

人はたゞあかれて後に世を出でよ　情の有れば名殘惜しきに

といふ歌を即吟したといふことが書いてあります。是は小野小町の鸚鵡返しなどといふものゝ同類で、即席の返歌に相手の言葉の一部分を利用し、無造作に且意外の效果を收めようとする特別の修辭法です。禪宗の和尙の問答などには、ちよつと奇拔なので流行したこともありましたが、言はゞ一種のへらず口若くは揚足取りであり、殊に此歌の如く嫌はれた方がよろしいといふ樣な皮肉は、年頃の娘の小式部で無くとも、如何に世馴れた者でも女ならば言はぬことでありませう。ましてや年をとつた母親を遣り込めたといふのは、あまりに興のさめる作り話と思ひますが、此場合には限らず、歌の應酬は昔から、いつでも是に近い言葉戰ひであつたやうに、傳へられて居るのであります。王朝時代の文學にも澤山に例のある如く、歌を實際生活から離れた一つの競技として、遊び樂しむ風習がもし無

かつたら、相愛する男女が互ひに相手のあらを捜すやうなことを言はなかつたと同じく、南無藥師も「そのみのかさ」などといふ秀句を出す必要も無く、小式部の内侍もとんな小僧らしい人生觀を、持つて居たやうに傳へられずに濟んだわけで、つまり皆さんのもう忘れて居られる別の興味が、此通り久しくへぼ歌を以て、親子の式部を累はして居たのであります。

實際又どうして其樣にまで、次から次へ和泉式部の話を、附加へて行く必要があつたのかと、不審に思ふ位であります。古い書物にはまだ出て居るのを知りませんが、近年になつて京都の人たちのよく耳にした話には、或時和泉が娘の小式部を連れて、北野の森に遊んでこんな發句を作つたといひました。

　啼くかとてきゝにきた野の時鳥

さうすると小式部が、それでは時鳥はとても啼きますまい。私ならば斯うよみますといつて、

　啼けきかうきゝに北野の時鳥

とロずさむと、果して時鳥が啼いたといふのであります。

此話などはよほど少數の人だけしか、之を本當と思ふことが出來まいと思ひますが、それでも人が面白がつて語り傳へ又は書き殘して居るのであります。

或は信長と秀吉と家康との三人が、一座をして時鳥の句を作つた。

　啼かぬなら殺してしまへ時鳥
　啼かぬなら啼かせて見せう時鳥
　啼かぬなら啼くまで待たう時鳥

何れもそれ〴〵の作者の氣質性格が、自然に顯れて居るのが妙だなゝ謂つたのは、あれは講釋師輩の作意であつて、全く此話から思ひ付いたものに相違ないなどと、發明のつもりで述べ立てた人もあるのですが、然らば其本元はどうかといふと、是とてもやはり誰か講釋師見たやうな者の工夫を俟たなければ、式部に此發句を作らせることは六つかしかつ

たので、たゞ三人の將軍よりも幾分か自然にきこえるのは、小式部は親まさりの天才であつて、何かといふと文藝を以て母に口答へをしたといふ評判が、古くからあつたからであります。

木遣節と御伽草子

和泉式部の歌問答の物語は、誠に意外な形をとつて、つい近い頃まで各地に行はれて居りました。例へば近世文藝叢書の第十一卷、俚謠の部に採錄せられた地方用文章と題する一書は、江戸本所の大工棟梁の家にあつた木遣音頭唄の集で、卷末には安政二年三月、御假屋橋の佐七之を改むとある新らしいものですが、其中の一篇「どうめい法師」といふのは

143959

やはり和泉式部の話であります。即ち我々の祖父の世の中には、職人たちにまだこんな唄が記憶せられて居たものであります。

今の人にはもう興味は無いけれども、荒筋だけを述べて見ると、昔叡山の阿闍梨どうめい法師といふ僧は、禁中に召されて御祈禱のなかばに、御簾吹く風の隙間から和泉式部を見染めて、戀慕の情のあまりに、出家の身では叶ふまいと、還俗をして蜜柑商人に樣をかへ、御殿のまはりを柑子蜜柑はと振賣してあるきました。御局たちが其聲を聽付け、呼入れて買はうといふと、蜜柑の一つ〳〵に戀歌を添へたとあつて、一つとやから十までの所謂數へ歌が列ねてあります。

五つとやいつや今やと待つ程に　身はかげろふと成るぞ悲しき

と謂つたやうなもので、有りふれた文句の格別感動も無ささうな歌ばかりだか、珍しの商人よ、今の戀歌の面白さ、上へも披露致さんと、も一つまけよとありければなどとあつて、十一目の一首を以て此曲を終つて居るのであります。

歌とさへ言へば忽ち興を催した昔の人の心持が、こんな勞働歌からでも大凡は窺はれます。今日でも關東で魚屋八百屋が賣物を算へるときに、急に調子を揚げて歌聲に數をよむことは、注意なされた人も多いことゝ思ひます。のんきな時世にはそれが愛嬌になつて、餘分のあきなひをすることが出來たので、歌を半分の資本としたよか〳〵飴屋おたさん金太さんといふ類の行商人も多かつたかも知れませんが、和泉式部が之に干與するに至つた原因は、是だけでは一向にわかりません、即ち如何に頓才のある木遣の音頭取りでも、突然に斯樣な趣向を發明することは出來なかつた筈だからであります。

木遣りは元來其文字の示す通り、大きな材木などを多人數で運搬する場合に、力を揃へる爲の掛聲から出たものです。信州諏訪大明神の御柱曳きなどでは、今でも至つて簡單な「皆さんお願ひだア」を繰返すだけですが、働く人々を倦ましめぬ目的から、氣の利いた音頭取りが色々珍しく面白い文句を應用するやうになり、江戸では殊にそれが演藝化して、十八冊の木遣唄の集が出來るまでに流行しました。文人の作つた詩歌とはちがつて、字句なども決して洗煉せられては居らず、單に當意卽妙の眼前の事物を題材にして、佳い聲を張り上げて歌ふとと、例へば此節のヨイトマケのおかみさんたちの如きものであつたかも知れませんが、毎日々々新奇を競うて居るうちには、追々種が不足して次から次へ、歌でも話でも知つて居るだけのものを、持込んで來るやうになつたかと思はれます。所謂どうめい法師の如きも正しく其一つで、言はゞあの時代の江戸の民間文藝の反映と見るべきものであります。

併し蜜柑賣の數へ唄といふやうな古風な物語が、どうして又いつ迄も記憶せられて居たものか、よもや本を讀む人から敎はつたわけでも無からうと思ひますが、此話は御伽冊子の和泉式部の下半部を、其まゝ採用したものです。十一首の戀歌も大體に於て一致して居るのです。而うして御伽冊子は江戸時代の始頃にもう本になつて居ますから、その以後二百年近くの間、こんな面倒な文句を誰かゞ暗誦して保存して居たのであります。或は本から取つたので、暗誦で無からうとも思はれぬことはありませんが、それにしては他の半分

の今一段と芝居がゝつた話が、顧みられなかつた理由がわかりません。御伽の方では和泉式部と道命阿闍梨とは、實は親子であつたと謂ふのであります。

道命阿闍梨

御伽冊子の「和泉式部」は、一見するところ恠奇を極めたるローマンスでありますが、是とてもやはり今一つ前の型があつて、必ずしも自由奔放なる個人の空想から、生れて出たものではなかつた樣に思はれます。

御伽はもと讀んで聽かせる爲に書いた話で、聽いた話を覺えて置く爲に書留めたものではありませんから、文章には隨分新たなる潤飾が加はつて居るとゝ思ひます。それをどゝ迄が原からのまゝと、境を立てゝ見る事はむつかしいが、先づ此物語の發端には、むかし和泉式部と申してやさしき遊女ありけりとあります。十三歳の年に藤原保昌といふ人と契をこめて、十四と申す春の頃、若一人をまうけたまふ云々。若とは男の兒のことであります。

恥かしとや思ひけん。五條の橋に棄てにけり。產衣のあやめの小袖の褄に一首の歌を書き、鞘卷の守り刀を添へて棄てけるを、町人拾ひ養育して、比叡山に登せけりと申します。是が大きくなつて道命阿闍梨にはなつたので、十八の歲に式部に戀ひ焦れて、商人に姿をやつし、柑子を賣りに來て算へ歌をよむことは、後世の木遣節も同樣であります。女は其歌に心を動かされて、呼び上げてしみ〴〵と話をして見ますと、法師に似げも無く、鞘卷の守り刀を持つて居ります。それから追々に素性が顯れて、さては我子かと言うたことになるのであります。

町人の子が叡山に登つて、十八でもう阿闍梨になるといふやうな話は、少しでも歷史を知つた者の想像し得ぬことですから、是が夙くから世に行はれて居たもので無いことは、

一見して明白であります。保昌は又式部の後の夫であつて、小式部の爲にも實父でなかつたことは誰でも知つて居りました。どうして又斯んな物語が始まつたものか、作り事とすれば尙以て不思議であります。が併し考へて見ますと、うそにも何かの動機が無ければならず、誤解にもそれ相應の原因が無ければ、特に此話を和泉式部へ持つて行くには及ばなかつた筈であります。

道命阿闍梨は形こそ僧徒ではあつたが、實は風流好色の貴公子で、全く家の光を背景として當時の社會にもてはやされて居た人のやうであります。彼の父は藤原道綱で、和泉が奉仕した上東門院の伯父に當り、やはり戀歌の交際などがあつた如く、傳へられて居ります。あの時代の婚姻の慣習には、なるほど今から見ると解し難いことが色々ありましたが、少なくとも道命の母を和泉式部だつたといふ點のみは、丸々の根無し草であります。

道命が曾て和泉の家に來て宿したといふ話は、宇治拾遺物語の中に出て居て、あの本は話の本であるにも拘らず、事實なるかの如く信じられて居ります。曉に獨り起きて御經を讀んで居ると、緣の板敷に老翁が來て蹈まつて居る。何者かと咎めたところが、私は五條の道祖神（サヘノカミ）であります。日頃有難い御經を聽聞したいと念じて居たけれども、常は諸天善神が降臨して守護なさるゝ故に、中々自分の如き者は近づくことを得なかつた。今宵ばかりは手水も使ひたまはず、愼み無き姿で讀經なさる故に、左右に憚るべき神々も居られず、此通り側近くまで來られましたと答へたと謂ふので、つまりは此法師が世にも稀なる美聲で、怖ろしい道の神までが潛かに其經を聽きに來たといふことを語り傳へる爲に、書殘された記事であつたのに、其點は到底信用し能はざる人々が、前半ばかりを史實と考へようとするのは無理であります。

五條の道祖神は以前あの橋の近くに、祭られて居た道の神であります。主として平民たちの卑近な祈願を聽き、殊に占ひの方法を以て人を導きたまふ神でありました。其道祖神が斯んな場合に出現なされたといふことは、何か隱れた曰くのあることで、從つて後世の御伽冊子に、稚兒を五條の橋に棄てたといふのも、偶然ではあるまいと考へられるのであ

ります。

神童發見譚

道命と和泉式部と、實は親子であつたと云ふが如き話は、勿論御伽草子より外には、有りさうにも無いと思ひますが、是と一部分だけ似通つた物語は、やはり隨分久しい前からありました。此婦人が今の語でいへば浮氣者、即ち輕々しく物に動かされる氣質で、或時は至つて小さな感激から、身分の低い青年を近づけるやうなこともあつたといふ一例が、さも事實らしく十訓抄といふ鎌倉時代の書物に出て居るのであります。

和泉式部が初冬の或一日、今の伏見稲荷社に參詣するつもりで、田中といふ處を通つて居ると、俄雨が降つて來て、笠が無いので困つた。その折に道の傍に働いて居る若い農夫を見かけ、彼の著て居るアヲ(襖)といふ上衣を脱がせて、それをかついで雨を凌ぎました。さうすると幾日か過ぎて後に、式部の住む家の庭さきへ、その賤の男がそつと來て立つて居ました。物は言はずに紙に書いたものを差出したと申します。それが一首の亦歌であつて、

しぐれする稲荷の山のもみぢ葉は　あをかりし(青かりし)より思ひそめてき

といふ氣の利いたあの時代の戀歌であつたので、忽ち敬服してしまつて早速呼上げて面會をしたとあります。

誓願寺の古緣起に、和泉が大往生を遂げたといふ年から、もう二百年餘りも過ぎて後に、斯んな話の京都の行はれて居たことだけは認められますが、之に據つて直ちに此歌人の品行を批評しようとするのは、私などには到底出來ぬことです。なぜかといふと前の字治拾遺の話も同樣に、話の要點は丸きり此外の部分に在つたからです。殊に十訓抄は書名の示

す如く、十種の教訓を説いた本であるにも拘らず、人は何でも物の哀れを知らなければならぬといふ、感心すべき實例に、之を引用して居るので、身分の此樣は低い者の中にも、ごく稀れには優美な心ばえを持つ者があるといふ點に、話を聽く人の興味を引かうとして居るのであります。

所謂あづまえびすの安倍貞任が、年をへし糸の亂れの連歌、さては其弟宗任の梅の花の獄中吟などが、感歎されようとした時節であります。即ち學問が少しづゝ中流以下の國民にも入つて行くと共に、或は經濟上既に優勢を占めた田舍者が、文藝の方面でも輕蔑せられまいとする反抗心から、特に此類の逸話をさがしても聽くやうに、なつて居た結果とも見られますが、尙それ以上に意味があつたらしく思ふのは、歌の作者が十五六歳の、ワラハとも謂ふほどの年少であつたといふ點であります。

私の想像では、歌を詠んだによつて始めて若者の非凡さが現はれたといふ所が、夙くから此系統の民間說話の、要素ではなかつたかと思ふのであります。前に列擧した幾つかの例でも知れますが、歌のよしあしの標準は時代につれて動いて居ます。今でこそ斯んなつまらぬ文句がと、をかしくも考へられるが、へぼが普通であつた時代も永かつた上に、單に三十一字の非會話式でさへあれば、一も二も無く心を動かす樣な人が、元は澤山に住んで居たのであります。つい近年までも少年少女の、たゞ歌のやうな形で何か言ふ者を、內容は考へても見ずに直ちに神童とした例は幾らでもあるのです。

是が日本の和歌といふものゝ、獨り文學の歷史としてばかり、考へて居ることの出來ぬ理由であります。和歌の用途はもつと廣かつた。人が自分の普通の者では無いこと、即ち神に憑られて居る淸き者であることを示すにも、歌を口ずさむのが一番有效な方法でありました。畏れ多い例ですが古くは二人の貴い皇子が、播磨の或田舍で御身分を御明しなされた方法も是でありました。後世和泉式部の母と娘が、同じ國で珍しい親子の對面をしたといふのも、やはり亦歌の力であつたやうに、語り傳へて居るのであります。仍つて次には其話に進んで行かなければなりませぬ。

ウルカ問答

播磨は如何なる理由でか性空上人の關係以外に、和泉式部の遺跡といふものが、まだ幾つとなく分布して居つて、現に御伽の道命法師と、明らかに同系統と認められる傳說が、書寫より西の方の赤穗郡にも一つあるのであります。赤穗郡誌の記す所では、那波の得乘寺の緣起に、小式部內侍は此郡若狹野といふ村に於て人となつたのを、母の和泉が訪ねて來て、歌に由つて偶然に發見したと傳へて居るさうです。

それは此村の名主五郎太夫なる者が、曾て人夫にさゝれて京に上つた折に、或寺の片ほとりで幼い女の兒を拾ひ、連れて歸つて育てたと云ふのですが、別に播陽古跡便覺といふ書物には、和泉式部の夫の和泉守道貞に別れて、稚子を育てるたより無く、例の五條の片ほとりに棄て置いたと謂つて居るさうです。

何れにしても大體に同じ話であります。書寫山參詣の歸りに五郎太夫の家に來て泊ると小さな娘が居て綿をつんで居る。其綿は賣るかと和泉が尋ねると、之に對して相變らず秀句の歌を卽吟しました。

秋川の瀨にすむ鮎の腹にこそ　うるかといへるわたはありけれ

卽ち小兒には似合はしからぬ一つの口合ひであります。

一方の木には式部が是に感心して此子めはよく歌をよむと譽めたところが、今一首おまけに斯んなのを詠んできかせたとも申して居ります。

秋鹿のはゝその柴を折しきて　うみたる子こそこめかとはいへ

此方はいよ〳〵不可解な歌でありましたが、どうして突如として鹿の子のことなどを言ひ出したかといふと、後に段々と分つて來るやうに、和泉式部の話には他でも鹿のことをよ

く說くのであります。

和泉が此歌をきいて、頗る不審を抱いたのは當然であります。そこで主人に色々尋ねて見ると、實はいついつの年月日に、京のどこそこで拾つた子だといふので、忽ち親子といふ事が明かになつたのであります。此話の中で私の殊に珍らしく思ひますのは、小式部の假の親が其名を五郎太夫と傳へられて居たことで、それは他の地方でも同類の話がある場合に、折々出て來る人名であるからであります。

その一例に少し變つて居るものを申せば、伊豫の北海岸から屬島にかけて、到る處に越智氏即ち河野一族の先祖、小千御子の物語が傳はつて居ます。御父は都の尊い御方、母は此國の和氣媛といふ美人であつたと申して、母と子を神に祀つてあるのが普通ですが、又是とは兩立せぬ言ひ傳へもあります。しかも和氣媛の父で同時に御子の養ひ親であつた人の名は、きまつて五郎太夫となつて居るのです。何でも無いことの樣ですが、まだ他にも例があつたので私だけは偶然で無いと思ひ、又必ず深い仔細のあつたことを想像して居るのです。

それから右のウルカ賣るかの歌ですが、是などは皆さんの鄕里に屢〻傳はつて居る說話であつて、不思議は寧ろ何故に斯樣に數多く存在するかといふ點に在ります。和泉式部の名と結び附いたのは、或はつい近世のことだらうかとは思ひますが、それにも早同じ型のものが、懸離れた近江國などに傳はつて居るのであります。

近江では勢多から南に入る山の中に、曾束といふ處があつて、昔猿丸太夫が隱れ住んで居たと謂ひますが、そこへ和泉式部が其太夫を尋ねて來たといふ話は、隨分時代ちがひのやうであります。ところが勢多川のほとりに子供が一人遊んで居て、やはりウルカの歌を詠じて稍得意の女歌人を驚かせました。是は親子では無かつたが、子供さへ此樣な名吟をするやうでは怖ろしいと言つて引返したことになつて居ります。即ち我々の所謂白樂天型、支那から白樂天といふ詩人が日本を見縊つて遊びに來ると、住吉太明神が老船頭に化けて、彼の詩を歌に譯して見せられたので、船頭さへ此通りでは如何なるえらい人が居るかわか

らぬと、遁げて返つたといふ話の系統に屬するのであります。

綿を賣りあるく人

ウルカはよもや中世の外來語ではあるまいと思ひますが、曾て斯ういふ食物の流行し始めた時代でもあつたものか、妙に諸國で此話が珍らしがられて居ります。福島縣白河の樓町といふ處に、今から百年餘り前に建てた宗祇戻りの碑といふのがあります。其石碑の文に依れば、文明年間の白河城東の鹿島で、一萬句の催しがあつた時、有名なる連歌の宗匠宗祇法師が、それへ行かうとして此地を過ぎ、途に一人の女が綿を持つて通るのに逢ひました。さうして其綿は賣るかと尋ねますと女が、

阿武隈の川瀨にすめる鮎にこそ　うるかといへるわたはありけれ

と詠じたので、女さへ是だ、この白河にはどんな名人が居るか分らぬと畏れて、そこから引返して去つたとあります。それが本當だつたら白河の爲には、記念碑を建てゝもよい名譽な話であります。

御承知かも知れませんが、宗祇法師の旅をして居た時代には、綿と申せば今の眞綿のことでありました。木棉の種が日本に入つて來たのは、ずつと古代のことだとは言ひますが、之を盛んに栽培して衣類や蒲團に入れたのは、兎に角に南蠻貿易以後だらうと思ひます。其上に奥州方面の氣候では、百姓が木綿を作ることは少なかつたのです。養蠶の方も至つて僅かなことで、賣買の目的で餘分のものを生産するやうになつたのは、京都へ商人が往來するやうになつてから、即ち今から百五十年か二百年以内の話でありました。從つて賣るか賣らぬかが問題になるやうな綿が、足利時代に東北にあつたらうとは考へられませぬ。つまりは是だけの事實も人が知らぬやうな世の中になつてから、ウルカの說話は始まつ

たのであります。ところが又他の一方には、綿に關係した職業で頻りに旅行をして居た男女が近世にはあります。それは綿打と謂ふ者で、或はほかじ屋と謂ふ地方もありました。即ち男は弓と槌とを持ち、女は「しの卷」といふ竹の管を携へて、頼まれて綿を打ちほかす人であります。歌と話のすきな世間師でありました。古綿の打ち直しもした外に、少しは買つたり賣つたりして居たやうですから、ウルカのしやれなども此連中ならば、奥州へ來て話して人を笑はせたかも知れませぬ。さうで無くとも綿打があるく時代になれば、もう此話は誰が聽いてもよく解つて面白かつたらうと思ひます。

つまりは昔話といふものは、早く古色を帶び易いものなのであります。又語る人の才覺によつて、我々が大切な點と考へる部分までも、色々と變更を加へて見たり、又は忘れたり誤まつたり、二つを結び合せたりしたものと見えます。松浦昔鑑といふ本には、肥前松浦地方のウルカの歌が出て居ますが、是なども確に元の形があつて、それが變化したといふことを考へさせます。だから何の事だかはつきりとは呑込めぬのであります。昔松浦郡玉島の近邊に、彌左衞門といふ紺屋があつた。女房の名は絲でありました。南山の内の浦といふ部落に、與八郎といふ者の女房おかや、縞木綿を織るとて此紺屋へかせ絲を染めにやり、斯んな歌を詠んだと云つて今も口碑に傳はつて居ます。

からくうや玉しまにおる絲たのむ　草の葉色に染めて得させよ

玉しまや川の鮎をも染めとるは　うるかきるかやうらにおるかや

即ち多分前の一首は與八郎妻の作、次の方は彌左衞門女房の返歌といふのであらうが、是だけでは其意味がもう明白でない。しかも松浦の玉島川は萬葉集以來、鮎を釣る歌を以て聞えて居る名所ですから、必ずや以前は他の地方も同じやうに、女が綿を持つて來たといふ一條が挾まつて居て、それでウルカの歌に面白味があつたことゝ思ひます。單純な村の人々には面白かつたといふ記憶のみがあつて、話の筋の方は却つて少し忘れて居るやうな實例を、今でも時々は見ることがあるのです。

樹に登る子供

如何にたわいの無い昔話でも、よく考へて居ると、少しづゝは意味がわかつて來るといふ實例に、今一つ御話をして見たいのは、赤穗のウルカ話の變化であります。此郡では、赤松村の大酒といふ部落に、ウルカ堂といふ小さな堂がありました。何故にそんな名があるかの説明は、奇拔以上であります。昔最明寺時頼が行脚をして此村を通つた時に、爰を何といふかと土地の人に尋ねると、「ありの原」と答へた。仍て時頼が、此堂をウルカ堂と命名したとは、わけの分らぬ話でありました。

是は自分の推測では、一つの場所に二つのよく似た問答傳説の附いて居たのが、後に混淆したもので、兩方とも地名だつたらうと思ひます。即ち一方は和泉式部の鳳のやうな話、ウルカの歌で旅僧を敬服させたからウルカ堂、今一つは梨の樹があるのに、何故に「ありの原」と謂ふかといふ類の、至つて簡單な問題を出して、却つて最明寺殿が遣り込められたとでも傳へて居たものでしよう。そんな話なら他に幾らも例があるので、決して無理な連想ではありません。

普通には、その旅僧は西行法師となつて居ますが、それも和泉式部と同樣に、歌を詠む人であつた爲かと思ひます。例へば淋敷座之慰に載せてある西行くどきといふ木遣唄に、

ヤレ西行が西行が
諸國修行に出るとて
尾張の國に聞えたる
熱田の宮にさすらひて
かほど涼しき宮立を

誰があつ田とつけつらん
そこで明神御返歌に
ヤレ西行よ西行よ
御身の名をば西へ行くと書きつるに
東へ行くは是も西行の僞か

とあつて、神と直接の問答のやうに言ひますが、別に西行が熱田の社頭に憩うて居たとき、神主體の人が出て來て、こんなことを謂つたといふ話もあります。

越後では西蒲原の國上(タガミ)山の麓の里に、西行戻り石といふ一丈餘の大岩があります。昔此僧が國上寺へ參拜しようとして、此石の傍に腰掛けて休んで居ると、八九歳の少年が群を爲して、山に登つて行かうとしました。蕨を採りに行くのだと聞いて、戯れにワラビで手を燒くなよと言ふと、童兒の中から一人が進み出て、御僧こそヒノキ笠で頭を燒きたまふなと答へた。是には西行一言も無く、早々にそこを立退いたので、それで西行戻りだといふ話、是も方々で人の說くことで、一羽の鳥をニハトリとは是如何の類の、輕口の元祖であります。

併し始めて此傳說の發生した頃には、此問答も此まゝでは無く、まづいながらに歌の形式を具へて、有難味卽ち聽く人を信ぜしめる力を保つて居たことゝ思ひます。それが只の笑ひ話のやうになつて、西行戻りの岩ばかり、前の姿を留めて居るのですが、それでもまだ問答の場面を想像して見ますと、山に登らんとして僧と相對して立つ童兒が、神童であつたといふことだけは覺り得られます。是が恐らくは播州赤穗の「ありの原」の、本の言ひ傳へであらうかと思ふのは、アリとは神靈出現を意味する古い語で、神木を有木といふのが此地方の習ひであるからです。

伊勢の雲出川の岸には、垂水の成就寺といふ寺があります。西行が昔此へ參詣に來た時に、一人の小兒が道の傍の木にかき登りました。其樣子を見て西行、

さるちごと見るより早く木に登る

と口ずさむと、童子は即席に其下の句を附けました。

犬のやうなる法師來たれば

伊勢參宮名所圖繪には、此事を繪に描いてをります。さるちごといふのは足利時代の俗語で、目につく程の可愛い少年といふ意味をもち、それを猿にかけて木登りするとしやれたのです。犬のやうな法師は輕蔑した批評で、犬と猿だから避けて木に登るのだと答へたところに皮肉がありました。よほど上手な連歌師の代作と見えます。

西行戻りの故跡

一休和尚の逸話と稱するもの〻中にも、和尚行脚の折に、道の傍の樹の上から、小便をしかけた童兒があつたことを說いて居ます。此方では大に其剛膽を賞して褒美を與へて去ると、い〻氣になつて、次に來かかつた武士に同じ所業をして、散々に懲罰せられ、結局は一休が復讐したことにしてありますが、それは如何にも一休らしくない作り話であります。即ち續南方隨筆にも論ずる如く、外國の話の燒直しでありませうが、しかも古來の樹上童兒と法師との對話譚が無かつたならば、最初から斯うした馬鹿らしい趣向も浮ばなかつたらうかと思ひます。

此一例だけを除いては、旅僧と或童兒、もしくは賤の女老翁などとの問答では、悉く白樂天の謠と同樣に、日頃得意で居た名流の方が、遣つ付けられたことになつて居るのです。若狹の桂木村の西行淸水が西行の掘らせた名水であるけれども、勝負事に行く者が之を飲むと、必ず負けるなどと言ひ傳へたのも、いつの頃からかは知らず、全國に多く分布する西行戻りといふ地名を、此歌人僧の敗北閉口の故跡なりと、考へ始めた結果のやうであります。

但し自分の意見では、西行戻りの「戻り」といふ語には、元來引返す遁げて行くといふ意味は無かつたやうに思ひます。漢字の戻の字も同樣ですが、日本語の「もどる」といふ語も、古くは「もとほる」と謂つて、前へも行かず後へも歸らず、一つ處に低徊して居ることであつたのです。それが押返すといふ意味ばかり強くなつて、元の處までといふことには頓著せず、どこへでも往つてしまふことをさへ戻ると謂ふやうになりましたが、それはほんの近世の變化で、地名の出來た時には、まださうでは無かつたやうに思ひます。

淨瑠璃で有名な、京の一條戻橋なども、後には淨藏貴所の父の三善清行が、我子の法力に由つて地獄から還つて來たからなどと說明しましたが、最初には決して其樣な意味で無く、つまり例の橋占辻占を聽く爲に、人が暫く往つたり來たりして、さつさと通つてはしまはぬ橋といふのでありました。西行戻りの場合も其通りで、今日傳はつて居る何れの例を見ても、言はゞ驚かされた、考へさせられたといふ迄で、尻に帆を掛けて遁げ還らねばならぬ程、とはくも怖ろしくも無い言葉ばかりでありました。

尤も日本の昔話の中には、智慧競べ、寶競べなどといふ一つの方式があつて、其方は白樂天などの如く、容易ならぬ勁敵が他處から挑みに來るのを、實力の優勢を以て、若くは機轉、才覺、方便、辯舌、其他あらゆる幸運を以て、未だ戰はずして之を遁げ歸らしめたことになつて居ます。をかしいのは嘘つきの女房の話。或は門前の蒟蒻屋の所謂蒟蒻問答などの形で、今も行はれて居ますが、それと西行戻りとは、實は主客の相違があつたので、此方では話は西行の側から聽いたことになつて居るのです。從つて負けたといふ記錄であつた氣遣ひはありません。つまりは旅人だといふ點から、二種の說話が次第に混同したのであります。

即ち此方は、單に困つた驚いたといふ西行の實驗を傳へたもので、何が其樣に困らせたかといふと、最も多くいふのは、方言を以て詠じた山櫻の歌、

いきつちまにちぼんだ花の來つちまに　ぶつぴらいたる桶とぢの花

といふ類の、誰が聽いても、最初は何のことか分らぬが、說明に由つて忽ち諒解する、謎

に近い言葉であります。第一に彼を驚かしたものも亦一種の謎で、普通ならば到底そんな事の出來ない少年や、身分の低い女が、歌人よりも上手な歌を詠み、又は此方も知らぬやうな六つかしい言葉を知つて居たことで、それもよく注意して見ると、實はさもあるべき理由があつたのを、單に最初は覺らなかつたといふ迄でありました。人間の智慮は存外に淺いものだといふことを、深く考へさせるやうな宗教上の練習に他ならぬのでありました。

謎のやうな言葉

西行戻りの故跡は幾らでも例はありますが、殊に有名な一つは陸前松島の、長老阪といふ峠の路の傍に、今でもまだある西行戻しの松であります。是も風土記には退僧松などと漢譯してあり、早速遁げ還つたやうに傳へた人もありますが、少くとも撰集抄には、西行は此地に二月餘も滯在したとありまするし、又話をきいても遁げなければならなかつただけの理由はありません。

話は書物によつて色々になつて居るが、大體三通りのちがつた傳へがあります。其一つは以前西行が俗に在りし時に、愛して居た女からアコギといふ言葉を聞いて、どうしても其意味が解らず、久しく氣にかけて考へて居たところが、此阪のあたりで老翁の牛を牽いて來る者が、アコギぢやないかと謂つて叱つて居るのをきゝつけた。其老翁實は松島明神の化身であつて、

伊勢の海あこぎが浦に引く網の　たびかさなればあらはれやせん

といふ古い歌から、其言葉の出て居たことが始めて知れた。それで恥入つて退去したといふのは、如何にしても呑込めぬ話であります。

第二の話も土地の人がさう信じて居たさうですが、西行此阪のあたりに於て、

月にそふ桂男のかよひ來て　すゝきはらむは誰が子なるらん

といふ一首を詠じ、内心頗る自得して居ると、そこへゆくり無く一人の童子出現して、それはいけない。斯うなくてはならぬと改作したといふのが、

雨もふり霞もかゝり霧もふる　すゝきはらむは誰が兒なるらん

といふ、更に一段とわけの分らぬ歌であります。それにもやはり恥ぢて戻つたと傳へて居ります。

是が近世の作り話だといふことを、再び説明する必要はありますまい。たゞ問題にしてよいのは此歌の中にも、播州のウルカ問答と共通な、子供の親は誰だらうといふ類の言葉が、まだ其痕跡を留めて居るらしいのは、何かよく〳〵のわけがあるのでは無いかといふことゝ、今一つは歌を詠んだ不思議の童子を、此土地では宮千代といふ名を以て傳へて居た理由とであります。

この松島の宮千代童子に關しては別に又美しい且つ奇怪な色々の話があるのですが、あまり手間がかゝる故にこゝでは略して置きます。要するに是も山王權現の化身かなどと風説せられた神童であつて、しかも一首の歌の下の句を付けかねて、案じ煩うて死んだと稱し、又は都に上らうとして馬から落ちて路の傍で死んだとも謂つて、處々の村に古塚の殘つて居る人であります。即ち單なる或日の偶然の文藝で無かつた故に、まちがひながらも斯うして永く記憶せられて居たのであります。

それから第三の言ひ傳へは、夢庵といふ人の書いたものに出て居るのださうで、文書としては却つて前の二つよりも古いのですが、此方では西行の出逢つたのは草刈る童でありました。何をして居るかといふ法師の問に對して、「冬萠えて夏枯れる草」を刈りに行くと答へたのが、どうしても最初には意味が解らなかつた。即ち阿漕の浦とは反對に、こゝに來て新たに疑ひを與へられたのであります。

併し言はれて見れば何だつまらない、それは麥のことでありました。即ち近世大に流行したナゾ（何ぞ）の元祖、その最も簡單なる一樣式であつて、斯んなものに迄脅されて遁げ

るやうでは、諸國行脚も覺束ない次第ですが、しかも田舍の子供までがナゾを遊戯として弄ぶことになつたのは、ほんの二百年か三百年來の風俗で、その以前は神々と人との間に居て、有難く貴といおぼしめしを、信心ある人々に傳へる職業の者だけが、わざと俗用の普通の言辭を避けて、斯ういふ六つかしい言語を使つて居たので、その形は今でも口寄せ巫(ゑと)などの物言ひに殘つて居ます。女も淸いものは古くから此任務に干與しましたが、託宣のあらたかなものは多くは小兒の口を假りて居ます。冬萠夏枯草の謎はたわいの無いものでも、其形式だけは極めて大切なものであつたのです。

江口と室積と

草刈る童といふことにも、何か隱れた意味があつたやうですが、今ではもうわかりません。我々の目にはあまりに平凡な麥の葉の謎なども、或は斯んな言葉を使ふ必要が昔はあつたものか、意外に弘く流布して居て、少なくとも仙臺附近の好事家の考案でなかつたことだけは明白であります。

例へば信州小縣郡の、別所溫泉に近い房橋なども、西行法師が童兒と問答をして驚いたと謂つて、「冬くき立の夏かれ草」といふ話が、信濃奇勝錄には出て居ります。それからずつと縣離れた鹿兒島縣の日置郡、伊作村の花熟里(ケジクリ)といふ部落の西行阪でも、昔西行がこゝへ來て路傍に休んで居ると、鎌と杣(そま)を持つて童子が一人通つた。「冬草の夏立枯れ」を刈りに行くと謂つたのを、やゝ暫らく思案して後に、始めて麥のことであつたと心づいた。斯んな片田舍にも風雅の言葉が有るやうでは、如何なる恥を見るかも測り難いと、早々に立退いたと傳へて居て、しかも西行の腰掛石と名づくる自然石が、今も其記念物として殘つて居るのは、誰が見て居たらうかと訝かるやうな昔話であります。

陸前松島と薩州の阿多とは、ざつと日本の里數で四百里ほどあります。西行法師では無い迄も、斯んな子供じみたナゾ〳〵に興味をもつた人が、少なくとも一人だけは此間を往來して居たのであります。さうでなければ偶然に同じ出來事が、そこでもこゝでもあつたと稱せられる理由が無いのです。然らば其旅人はどういふ種類の人であり、いつの世如何なる生活の爲に、國々を廻ることにはなつたのか。それが私の皆さんと共に考へて行きたい要點で、話はたゞ之を導く道しるべの如きものでありました。

西行法師と應酬をした歌の相手が、女性であつたといふ例も亦幾つかあります。例へば安藝の宮島の山に在る西行戻し、是は老女に逢うて路を尋ねたところが、何のいらへも無く行過ぎようとするので、

うつせみのもぬけの殼にと問へば　山路をさへに教へざりけり

といふ一首を詠ずると、老女は微笑して「もぬけのからか。」と言はなければ歌にならぬと言つたので、忽ち亦閉口して去つたと申します。

京都附近では嵯峨の天龍寺の門前から、少し東へ行つた處に架けてあつた歌詰橋、曾て西行が童子に逢うて詠歌問答をしたとも謂ひ、又一説には實は歌女橋と書くべきで、昔此橋の袂に酒を賣つて居た家の女主が西行法師の、

つぼのうちにほひ來にけり梅の花　先づさけ一つ春のしるしに

といふ歌に對して

つぼの内にほひし花はうつろひて　かすみぞ殘る春のしるしに

と返歌をしたとも謂つたさうです。山州名跡志に「信用し難しと雖も古より之を稱する也」とあるのは尤も千萬で、何か必ず思ひちがひ、記憶の誤りがあつたことゝ察せられるのであります。

さういふ中にも只一つだけ、是ばかりは實際あつたことの如く思はれるのは、西行と江口の遊女妙（タヘ）との贈答であります。その時代に最も近い新古今集の旅の部に既に採錄せられてゐるのみならず、意味もよく解つて且優れた歌であります。しかも勅撰集の選者

が、何人の口から之を傳聞したらうかといふことを考へて見ると、貴人の家の歌合せ又は屏風に書いたといふ吟詠とは、事情の大分ちがつて居た事を感じます。當時西行は遠い國國を旅行ばかりして居たに反して、京都の文人たちは始終いはゆる難波わたりに遊びに行きました。此話の江口側から出たらしいことは想像し得られるのであります。

それ故に僅かな年月の間にも、物語は面白く成長したやうに見えます。近世の江口の里の故跡には、君堂があつて江口の君と西行の木像を安置し、寺の名を普賢院と稱して名木の西行櫻さへありました。さうして謠曲の江口には、その女性が實は普賢菩薩の化身であつたことを述べて、もう完全に書寫の性空上人が、室の遊女に逢ひに來た話と混同してしまつて居るのであります。

旅僧と遊君

西行と江口の遊女との歌問答は、新古今集を見れば至つて偶然な出來事で、單なる文藝の遊戯として、今の人でも時々は遣りさうなことであります。即ちこの僧が天王寺へ參る路で、俄雨に遭つたので一夜の宿を求めると、多分貧相な旅姿であつた爲か、主の遊女が許さなかつたといふのです。そこで西行が、

世の中をいとふ迄こそ難からめ　かりの宿りををしむ君かな

君のやうな境遇の人には、浮世を棄てるといふことは六つかしからうが、その本物の假の宿を、一夜法師に貸すことさへ惜しいかねと、少しからかふ積りでしやれを言ふと、

世をいとふ人としきけば假の宿に　とゝろ留むなと思ふばかりぞ

あなたも世棄て人なら、そんなに假の宿を念がけぬがようございますと、早速に一本參つたので、所謂賣言葉買言葉の、憎まれ口のやうではありますが、底には幽かな男女の情味も潜んで居るのが、優にやさしく昔の人達には感じられたのであります。

古今集には僧正遍昭と小町との應酬と稱する、苔の衣はたゞ一つといふおもしろい歌もあります。それから六百年後の、一休和尚と地獄太夫との問答に至るまで、是は日本の中流社會の、話の種ともいふべきものでありました。日本ばかりでも無いかも知れません。斯ういふ悟りきつた老宗教家と、欲海の底の珊瑚か、玉藻かと思ふやうな美しい者との間に、意外な遭遇を見又背競べを見ることは、何度形を改め人の名を取替へても、繰返して居たい物語の興味でありました。うそでも差支へなかつたのであります。

だから自然に任せて置けば、話は際限も無く成長しました。さうして私たちはその成長するものを移し植ゑ、水灌ぎ土かひ、屢々きれいな花を咲かせようとした者のあつた事を信ずるのであります。海の邊でも野の末でも、例へば清い泉があつて里を擧つて之を汲んで居るやうな場合には、大抵は弘法大師が發見したことになつて居ます。或は石芋食はず芋など〳〵謂つて、邪慳な人が惜んで與へなかつたからなどいふものも、何れも旅僧と應對したと傳へられるのは女性でありました。たゞそれが江口の君などとちがつて、年老いたる姥であつたゞけでありますが、時は如何なる美女をも關寺小町と化し、又卒都婆小町としてしまふのみか、寧ろ多くの女は老いたるが故に昔を語るので、話が婦人の口から世に傳はるといふ點だけは、あれもこれも一つであります。

それが今日の身の上話のやうに、じみなくすんだものでなかつたことも、亦我々の想像し得る所であります。言葉にあやを添へ又句の形をとゝのへて、成るべく聽く人の印象を濃かならしめんとしたかといふことは、前にも既に申しましたが、尙進んではそれ以上に、音樂を伴なひ手足のわざを以て、當時の光景をまのあたりに、見せようとした證據も澤山に殘つて居ります。和泉式部の母と子の對面なども、話の主客は顚倒して居ますが、やは

り一方は旅の者であり、意外の問答から普通の人でなかつたことを知るといふ點で、根原のもとは一つであつたことが分ります。しかも各時代と地方とに亘つて、同種の物語は百を以て算へるほどもあるのですが、それが半分は緣起又は傳說として殘り、他の一半は今も尙舞の形を以て保存せられて居ます。人によつては說話の方が前からあつて、それを歌に作り舞の手を付けたやうに思つて居る者もあらうかと思ひますが、事實は正に反對であつたと見なければ、說明の付かぬことが幾らもあるのです。なるべく面倒な理窟は拔きにして、今度は眼の前の實例に由つて、少しばかり其歷史を述べて見ようと存じます。

歌舞の菩薩

書寫の性空上人が、室の津の遊君を尋ねて、生身の普賢菩薩を拜んだといふ話は、日本古來の佛敎奇瑞譚の中でも、誠に有名なる一つに算へられて居ますが、それが歌舞に遊び又信仰に携はるところの、女たちの口から傳はつたといふことは、今まで心付かぬ人が多かつたやうであります。併し上人がおしやべりで其實驗を人に談り、又は日記などに書き殘して置いたのであつたら、それはもう昔話では無いから、從つて、今の樣に流布する筈も無かつたのであります。昔話の條件は何度も〳〵、同じ形を以て色々の人に、繰返して語り聽かせることでありました。

殊に斯ういふ有り得べからざる事が、實際あつたかの如くに人を信ぜしめる爲には、更に特別の支度を必要としたかと思はれます。室の遊女の長者が若い美しい仲間を集めて、

周防室積のみたらひに　風は吹かねどもさゞら波立つ

と歌つて居る處を、物陰から隙見をすると、正しく白象に騎つた貴い菩薩の御姿であり、近よつてまともに見れば世の常の佳人であつたといふ一條の、繪の如く又詩の如くに感ぜられるのは、即ち此港の遊女たちの、後々までの舞の手振を傳へたものでありましよう。中世のあそびは室の津には限らず、神佛の奇瑞靈驗を說き語るのが普通の職分でありました。其上に室の港は特に佛法の因緣が深かつたやうに見えますが、それは多分書寫山の、久しい間の影響であります。歌の章句の「周防室積の御手洗」が、早く播州の室津へ轉用せられたのは、即ち此種の女が移動を常の生活とし、よく方々の歌謠に通じて居た結果で、或は古くから性空上人系統の物語が、前の地にもあつたことを想像せしめると同時に、それが後々西行と江口の君との話に結合したとしても、格別の不思議は無いことになるのであります。

近世の江戸でもお竹大日如來と稱して、我家の水仕女が後に大日さまと爲り、光を放つて去つたといふ話が傳はりました。觀音や地藏には殊に或一人の女の名を名乘つて、崇拜せられて居た例が多いやうであります。一方には又中世の遊女などに、斯ういふ貴い佛菩薩の名を、付けた者の幾らもあつたといふ事實は、互ひに關係の無いものとは思はれません。遊女が普賢菩薩に見え、忽ちにして又もとの遊女に見えたなどといふことは、今日の我々には考へも及ばぬ話でありますが、それは恐らく陸前の西行戻しに於て、牛飼ふ翁が松島明神の化身であつたり、草刈る童が山王權現の、かりに現じたまふ御姿と信じられたのと同じことで、昔は殆と毎日の出來事のやうに、各地で實驗せられた凡人生活の一部であつたらうかと思はれるのです。さうして其中の最も美しく且つ花やかな記憶だけが、信仰と手を分ち文藝と手を繋いで、今の世までも殘つて居るのであります。

能の謠の五百以上もある曲目に於て、其半數までが神と人、若くは精靈と人との交錯で

あり混同であつて、必ず一人のシテが前後二つの舞を舞ふことになつて居るのも、此意味を知つて始めて起原を尋ねることが出來ます。即ち最初から目に見えぬ不思議のものが、先づ實在の人の姿を假りて、現はれ且つ物言ふ習はしが無かつたならば、とても此樣に多くの趣向が、繰返して模倣せられるわけは無かつたのであります。さうして他の一方には我身を空家にして、神や精靈の宿を貸す者が、昔は幾らも居て同時に歌舞の道に携はつて居りました。それが自分の方から進んで借り手を搜し求める場合を、謠曲などでは特に物ぐるひと名づけて居たのであります。つまり物狂ひは一種の職業であつて、曾ては遊女も之に携はつて居りました。故に普賢菩薩の物語が、永く室の津の附近に傳へられて居たのであります。

子を尋ぬる物狂ひ

能より以前の狂女なるものは、今日精神病院の中で見るやうな、あるべかゝりの不幸者では無かつたので、多くは人に賴まれては狂うて見せて居ります。例へば有名な「隅田川」は都北白河に住む女、一人子を人あき人に取られ、其跡を慕うて武藏國まで下つて見ると、其子は旅に病んで歿し、塚には梅と柳が咲き靡き、其樹陰に里人が供養の大念佛をとなへて居りました。

ワキ「都の人といひ狂人と云ひ、面白く狂うて見せ候へ。狂はずば此舟には乘せまじいぞとよ」

と渡し守が申しますと、女は忽ち一心になつて、狂女の舞を舞ふのであります。

即ち「くるふ」とは元來舞ふことであつたのであります。菊でも朝顔でも、我々が狂ひ咲きといふのは、何れも美しく又面白く、亂れて舞つて居る花のことです。能では斯うして狂うて居るうちに、必ず今迄久しい間、見ることを得なかつたものを、不思議に見出すことになつて居て、それが多くの場合に和泉式部などと同じく、別れて年を經た我兒でありました。

隅田川でも松若少年のありし世の幻が、更けて夜念佛の鉦の音にさそはれ、髣髴として母の前に現れることになつて居りますが、是は殆と唯一の珍らしい除外例で、其他は必ず生きてめでたく、我子に廻り逢ふことになつて居るのであります。櫻川といふ謠のシテは、幼ない櫻子を見失うて、思が亂れたといふ美しい母で、手には小さなすくひ網を持つて出て來ます。

男「さん候、狂はするやうが候。櫻川に花の散ると申候へば狂ひ候ほどに、狂はせて御目にかけうずるにて候。」

女は日向の者といふにも拘らず、遙々常陸の國までうかれて來て、櫻川に花の散る頃に物狂ひをするのであります。さうすると尋ねる愛娘が出て來まして、

「何をか今はつゝむべき。親子のちぎり朽ちもせぬ、花さくら子ぞ御覽ぜよ」

と言つて、連れ立つて歸つて後に母共々に尼になるとあります。

是とよく似た趣向には、三井寺、柏崎「これかや春の物狂ひ」と謠ふ百萬もあります。どうして此通りに幾つと無く、同じ樣な物語を曲にしたかといふと、其場の情景にも若干の變化はありますが、それよりも大切なのは、色とりゞ〳〵の舞の手の面白さでありました。謠の章句は一休和尚とか、その他大抵は同じ頃の人の作つたものが多いのですが、舞だけはそれよりもずつと古くから、既に朝野の間にもてはやされて居たのであります。

九條關白兼實の日記などを見ますと、鎌倉幕府時代の始頃に、既に遊興としての物狂ひの舞がありました。即ち神祭りの式の中の最も面白い部分を、人が別の日に眞似させて見

物したのであります。又日吉神社などに奉仕した巫女が、何でも無い時に方々の家をまはつて、神の舞を舞つたやうであります。明月記の安貞元年前後のところに、日吉うれしや水狂女奔入など〳〵ありますのは、武藏坊辨慶を始めとして、叡山の法師の間にもてはやされた「鳴るは瀧の水」といふ舞の歌が、やはり狂女の口から出た證據であります。

そこで少しは手數でも、幾つかの謠曲を比べて見ないと、物語と舞との關係がはつきりと致しません。殊に何故に母と子、それから老いたる父と其せがれ、妻と其夫、稀には又主人と之を尋ねあるく臣下との再會が、特に此やうに永く面白かつたのかも分らず、又私がウルカ問答麥の葉問答の類を、曾て旅の女の舞の歌から出たもの〳〵やうに、考へて居るわけが知れぬのであります。

天王寺の弱法師

いはゆる狂亂の舞と不思議の再會と、この二つのものを結び合せた謠はまだ澤山あつて、とても細かな點までは比較して見ることも出來ませんが、斯ういふ珍しい趣向の文藝が、特に日本にばかり發達する理由はあつたので、和泉式部の國々の物語なども、畢竟は同じ系統に出たものだといふことを述べる爲、次には有名な弱法師（ヨロバウシ）の一曲だけを、少し詳しく御話しして見たいと思ひます。

河內國高安の長者、左衞門尉通俊の一子俊德丸は、繼母の讒言を受けて家を逐はれ、盲目の乞食になつて方々を狂うて歩きます。それが此謠の弱法師で、十五六歳の少年のやう

に見えます。彼の父は後悔の餘りに、春の彼岸の一七日の間、難波の天王寺に出て施行を引き、我子の二世安樂を祈願して居ると、そこへ弱法師も狂ひながら出て來て、長々と舞ひ歌うた末に、親に扶けられて再び家に還るのであります。

「げにも誠のよろ法師とて、人は笑ひたまふぞや。思へば恥かしやな、今は狂ひ候はじ。今より更に狂はじ」

といふのが、舞の詞の終りになつて居ります。

たしかに舞は面白い舞のやうですが、河内は天王寺からあまりに近く、如何に盲目でも父の名を知らずに遣つて來るといふのが、少し意外に思はれます。是は多分古くから天王寺にあつた毎年二月の聖靈會のちごの舞を移して、それへ此地方の物語を强ひて結び付けたに過ぎぬもので、ヨロバウシは卽ち其舞の元の名であつたらうといふことであります。

然るに此以外に、別に又美しい狂女をシテとした天王寺物狂といふ一曲があります。和泉の人とばかりで名は言ひませぬが、他の色々の書物に蔭山長者の娘といふのが是であります。前の年の御寺の聖靈會に、稚兒の舞の役を勤めた俊德丸の舞姿を愛して、互ひに心を通はせて居りました。其後俊德丸は難病に罹つて目が見えなくなつた上に、繼母に憎まれて天王寺の邊に棄てられて居たのを、物狂ひとなつて尋ねて來て、測らず再會するといふのが、此方の話の筋であります。

和漢三才圖會などに採錄した河內高安の傳說は、大體は此話に近いけれども尙一致しない點があります。俊德丸の繼母は生みの子の次郎丸を家督に立てたい爲に、百三十六本の釘を打つて呪詛したので、俊德丸は癩病になり目が潰れた。めのとの仲光に命じて彼を天王寺の引聲堂の庭に棄てさせた。それを蔭山の娘が尋ねて來て、觀音の靈驗によつて奇瑞の羽箒を授けられ、之を以て身を撫でると忽ち元の美しい姿に復した。繼母と次郎丸は後に困窮して乞食になり、蔭山長者の施行を受けに來たとあつて、此點だけは前の弱法師に似て居るのを見ると、或はもう傳はらぬが、更に第三種の演藝法があつたものかとも考へられます。

後世になつても此話を芝居にしたものは色々ありました。淨瑠璃でよく聞く合邦辻などは、即ちその最も新らしいもの〻一つで、是は淨瑠璃式に若く美しい繼母が、僞つて俊德丸に不倫の戀慕をすることになつて居ますが、それもやはり以前から、さういふ形式の物語があつたからであらうかと思ひます。

要するに天王寺の佛教と長者の美少年と、別離と再會と面白い舞とがあれば、それで此一曲は成立つに十分であつたので、尋ねて來る人は父であれ母であれ、さては花のやうな狂亂の女性であれ、どう變化しても興味には影響なかつたのであります。從つて土地により神佛の信仰によつて、次々に年代や固有名詞を改めて行くことも、差支が無いばかりか、時としては必要であつたかも知れません。

烏帽子の力

能の物狂ひの舞に於て、シテが男性であるのは木賊と丹後物狂と歌占と、この三つは父親が子を尋ねて逢ふ話、其外には高野物狂と土車とが主人の行方を搜す家來の狂ひ舞ふことになつて居ります。土車の方では最初から主人の若君を同伴して居ますが、其子方が家來と一緒になつて前の弱法師の樣に狂ふのであります。

それと父を尋ねる弱法師花月の二つを除けば、其他の二十近くの物狂ひは悉く女性であります。然るに注意すべきことにはその女の舞手が、多くは烏帽子を著て舞ひ狂ふこと、今日の芝居の道成寺や靜御前と同樣であるのみならず、烏帽子を著ると物狂ひとなつてよ

く舞ふことになつて居るのです。例へば隱岐院ではワキの旅僧は現に尋ねて居る父であるのに、わざ〳〵女に向つて、「此烏帽子を召して面白う歌うて見せ申され候へ」と言ひます。水無月祓に於ては室の津の遊女、巫の樣なる有樣で茅の輪を持つて賀茂の糺の社に參詣し、六月晦日の祓の謂はれを語りますが、是も別れた夫を尋ねて居るのですが、後に再會すべき男が目の前に居りながら、やはり「此烏帽子を召されて面白う舞うて御見せあれと人々の御所望にて候」などと氣樂なことを言つて居ります。

それから立田物狂の元の男なども「へりぬり直垂取出し、之を著てとう〳〵御舞ひ候へ」と申しまするし、賀茂物狂では狂女自らが、

風打烏帽子かりに來て　手向の舞を舞ふとかや

と謠ひながら立つことになつて居ます。單に戀しい親や夫を探しかねて物狂ひになつたといふだけならば、何も此樣な男の姿をして舞ふ筈は無いのでして、即ち此謠の章句にもあるやうに、

シテ「山藍に摺れるころもの色添へて」地「神も御影や移り舞」

の、是が一つの要件でありました。以前心からの信徒たちが、祭の日に神を御招き申して、寄ましの巫女の自ら意識せぬ言葉から、不思議な神の御告を聽いて居つた作法が、つまりは面白い男舞の原因であつたのであります。故に親子夫婦の心付いて再會すると、忽ち元の正氣に復つたといふのであります。是は決して私の想像說ではありませぬ。前に引いた玉葉の建久二年二月七日の條にも、禁中に散樂があつて僧三人俗三人が出たとありまして、樂人には烏帽子を免された、狂物たるに依つて也、是先例なりとも記してあります。

柏崎といふ謠でも越後柏崎の某が妻、をつとは歿して一子も亦身を隱すと聽いて、之を慕うて物狂ひになつて、善光寺の夜念佛の席へ入つて來ます。それがやはり亡夫の形見と稱して、烏帽子直垂を持つて出て舞ふのであります。佛の前の舞には無用のやうでもありますが、是は寧ろ其約束の甚だ久しく且つ固かつたことを意味し、又念佛と物狂の曲との關係が、日本の固有宗教の媒介によつて、結ばれたものらしいことを想像せしめます。此

以外にも物狂ひの舞手は、必ず何かかたみといふ物を持つて出て來ました。例へば花がたみの照日の前は、花筐と玉章とを手に持ち、天王寺物狂と高野物狂とでは、共に形見の文を携へて來て、其内容を語ります。それ故に私は小野お通の召仕の千代といふ者が、文ひろげの狂女であつたといふ話によつて、彼も亦淨瑠璃曲中の人物では無いかと考へて見たのであります。

それから又丹後物狂の父は、我子の記念のさゝら八撥を持つて舞ひ、野上の宿の上蔦といふ班女の花子は、吉田少將の遺した扇を持つて居ます。芝居の保名などにもあるやうに、狂亂のしるしは必ず笹の枝に扇をつけますが、それは何れも本來は靈託の力を代表し、古い言葉では手草と謂つたものゝ名殘りでありました。さうして私が特に此事を申して置きたいわけは、やはり短冊を枝につけて出る歌占といふ物狂の舞が、分けても和泉式部の話の分布を説明するやうに思ふからであります。

百萬と山姥

同じく佛法の狂女の舞の中でも、柏崎は三井寺よりも、寧ろ百萬の謠によく似て居ます。又折角再會する我兒が、もう此世の外の幽靈であつたといふ點を除けば、隅田川なども之と近い方であります。即ち寂しい湖上の寺の月の影に、泣いて少年が隱して居た身の上を打明けるといふ趣向は一つしか無くて、他の多くの例では混雜した人込の間に於て、測らず巡り逢つたといふことになつて居り、殊に右申す三つの曲は、何れも群衆念佛を以て其因緣とした點が一致して居るのであります。西播州の和泉式部親子の物語などは、今では其出處が既に不明になりましたけれども、此女性と最も關係の深い京の誓願寺が、曾て歌

念佛の勢力ある一中心であつたことを考へますと、やはり同じ道筋を通つて此樣に成長して來たものかも知れぬと思ひます。

京都の昔の春を知つて居る人ならば、百萬は實にたまらぬ位面白い能であります。古くは之を「嵯峨の大念佛の女物狂の能」と謂つて居りますが、春の彼岸の花盛りの頃に、あの釋迦如來の御寺では毎年の念佛會を營みました。それへ老いたる遊女がうかれて來て、念佛の音頭を取つて舞つたのであります。

「げに百萬が姿は、もとより長き黒髪を、おどろの如く亂して、ふりたる烏帽子引かつぎ、又眉根黒き亂れ墨、うつし心かむら鴉、うかれと人は添ひもせで、思はぬ人を尋ぬれば、親子の契りあさ衣、肩を結んで裾に下げ、裾を結びて肩にかけ云々」

とありまして、是も亦久しい前に失つた我子に、此群衆の中で逢ふのであります。

そんな話を何遍もする氣は無いのですが、爰で私が考へて見たいのは、その百萬といふ舞女の名前であります。奈良には今でも百萬が辻子（つじ）といふ處がありまして、かの物狂の百萬は爰に住んだと謂ひ、或は春日社の巫女であつたとも申しますが、それが何故に百萬と呼ばれたかは、まだ滿足に說明せられては居ないのです。謠曲拾葉抄などといふ本には、百萬の尋ねて終に逢つたといふ子息は、即ち嵯峨の大念佛を始めた圓覺上人といふ名僧で、祈願の爲に處々に於て融通念佛を興行し、參集の人數が十萬に達する毎に供養をしたので、時の人が十萬上人といふ名をつけた。その十萬上人の親だから百萬と、作者が付けたものだらうと言つてあります。或は赤堀又次郎さんの引用せられた唐招提寺の記錄では、上人の御弟子が七十萬人あつたので俗に百萬上人と稱へたともあるさうです。さうすれば母の名では無かつたので、從つて謠の文句とは合はぬことになります。

ところが爰に一つ奇妙なことには、同じく佛法の敎を說いた山姥といふ謠に、字はちがひますが百魔山姥といふ舞のことが述べてあります。京で有名な遊女に此舞を能くする者があつて、善光寺へ詣る道で山姥の本場の、あけろ山の近くに一泊したところ、本物の山姥が出て來て舞を舞つて見せてくれるといふのであります。但しそれも何故に百魔と謂つ

たかは説明して居りませぬが、京から信州の念佛道場へ往來したといふからには、此舞も恐らくは念佛の音頭と關係のあつたものと思はれ、從つて嵯峨の清涼寺の百萬と、同人で無いまでも、同職ではあつたらしいのです。さうでなければ大和の舊都に故跡を遺したといふことが不可解になります。つまり中世の歌念佛には百萬と名づくる婦人が出て來て參加したのです。

謠曲の山姥は三井寺以上に文學的なもので、其文句には考へなければ分らぬ部分が多い。一休和尚の作などとも申しますが、さうで無くとも舞が古く、歌章は後から附けたことは確かで、從つて其舞は本來百魔又は百萬に屬したものと思ひます。だから前に引いて置いた百萬の謠の一節は、其まゝに山姥の舞姿であります。さうして能の中には出て來ませんが、我々の知つて居る山姥の物語には、やはり亦母と子との關係が含まれて居たのであります。

萬日といふ女性

京の誓願寺を道場とした一遍上人が、六十萬人決定往生を以て標語とした樣に、所謂融通念佛の宗派では、非常に稱名の數勘定に重きを置きました。其遺風の今に傳はつたものが卽ち百萬遍であります。中古の記錄には貴とき上人に勸進せられて、毎度百萬遍の念佛を申した事が見えますが、是には恐らく何か特別の計算法があつたのであります。例へば大きな珠數の輪をぐる〳〵とまはして、その親玉が來たときに鉦をかんと鳴らし、それを五千とか一萬とか算へるといふのが、今日村々の疫病よけなどの際に、採用して居る一方法であります。

故にもし大念佛の上人が十萬人を一堂に會し得るとしたら、百萬はをろか何千萬遍でも容易なことですが、實際それ程に人は群集しませんから、そこで色々の手段を講じたらしいのであります。

空也派などでは踊躍歡喜と言つて、導師が先に立つて拍子面白く踊りました。奈毛天踊とか念佛踊とかいふものは、つまりは出來るだけ早く澤山の念佛の回數を重ねんが爲に、多人數の合同を謀るのが目的の主たるものでありました。歌舞に長じた女性が念佛の音頭役として有効であつたこと、それが百萬といふ名を以て呼ばれたことも、此意味に於て少しも奇怪では無いのです。たゞ何故に其念佛會の舞の末に、別れて久しい我子に再會するといふ趣向が是ほど人望があつたかは、是れだけでは解説が出來ません。

考へて見なければならぬことは、念佛の勸進者は同時に衣食を此業から仰ぐ一種の職業であつたといふことです。殊に歌舞の伎藝に至つては到底念佛其もの〻樣に、簡單に民間から發生するわけには行きません。即ち前々から此業に携はつて居た家筋などがあつて、それが次第に此方面に利用せられたゞけで、それ故に賀茂とか龍田とかの社の前の事件が、同時に天王寺善光寺の法會の筵にも現はれたことになつて居るのかと思ひます。つまりは神佛二種の物狂はもと同じ家の舞でありました。趣向の似て居るのは起原の一つであつた證據です。本居平田二先生以後の日本人の如く、我々の先祖は明瞭な神佛の差別を持つて居ませんでした。面白いといふ感じは至つて單純なものであります。

そんなら佛法の方面で其舞が不要になつて、それから其人たちと物語はどうなつたか。能は早くから男性が其手振を學び、女の姿になつて更に烏帽子を著て男舞をして居ます。出雲の國女の時代は勿論、東國では桐大藏が太夫であつた頃まで、女は尙歌舞伎を支配して居ましたが、徳川氏の行政が干渉して次第々々に芝居も男子の世界になり、女役者は一旦殆と絶滅したのであります。

それでも丸々普通の農夫の妻にはなりきれなかつたと見えて、歌舞とは緣を切つても物語だけは幽かながら記憶して居ました。日本は世界にも珍らしく昔話の多く殘つた國です

が、之を保存した功勞の大部分は、やはり以前の關係者の少しばかり零落して、村々の社や堂に隷屬し、若くは獨立して宗教的職務を續けて居る老女などに在つたかと思ひます。

例へば越後の田舍に近世まで居た萬日といふ雇はれみこの如きは、其名稱から推定すれば百萬舞女の末派でありました。後には兩部の神道に屬して、祭の日の舞をする以外に、家で口よせのやうな仕事ばかりして居たさうですが、萬日といふ名は彼等が萬日念佛の法會に與かつた爲でなければ、起る道理はありません。萬日念佛は亦大規模なる群衆念佛で、其頻々たる流行には隱れたる中心の力があつたのであります。それが追々に只の開帳と變つて、斯ういふ勸進者は不要となりました。盛岡の近傍にも近い頃まで、萬日といふ一階級が殘つて居たさうです。春の初の物吉などを職業として居ながら、尙萬日の取子と謂つて、賴んで名義ばかり彼等の子にすると、丈夫に育つといふ俗信だけは殘つて居ました。即ち百萬說話の最後の破片であります。

姥が池と念佛水

念佛と女性と稚兒と、この三つのものを組み合せて、たゞ不思議の再會といふ點だけの缺けて居る話が、又方々の村に殘つて居ました。土地の人たちはそれを實際あつた歷史のやうに考へてゐますが、幾つでも同じ例のあるのを見ると、やはり話であります。たゞ今日までは如何してそちこちに分布したかを、知ることが出來なかつたのでした。

例へば美しい淸水の湧く池があります。其岸に立寄つて南無阿彌陀佛と唱へると、水の底から泡がふつふつと立つて來る。責め念佛と名づけて早い調子で念佛を申すと、水玉はそれにつれて愈々盛にあがつて來ると謂ひました。さういふ處にはよく姥と小兒の話が殘

つて居るのであります。

是は實際は默つて立つて居ても、暫らく見て居るうちには泡の立つのが目につくのでしたらうが、人は決してさういふ風には評判をしませんでした。越後三島郡蓮華寺といふ村の奥にあつた姨が井などは、其井戸の傍に寄つてヲバと大聲で呼ぶと泡が浮び、之を疑ふ人が試みにアニと喚び、又はアネエとどなつて見ても更に應じないなどと申して居ます。つまりは一同がさう信じ切つたのであります。土地の言ひ傳へでは、昔此村の何とかいふ家の女中が、主人の兒を守りして居て、誤まつて此井戸へ落したからだと申しました。

靜岡と江尻との間に在つた姥ヶ池などは、東海道の往來に近かつた故に今一層有名で、わざ〳〵道よりをして見に來る人が多かつたさうであります。其由來談は甚だまち〳〵でありますが、普通に土地で話したのは越後の方とよく似て居りました。駿國雜志といふ書物に書いてあるのは、或る家の乳母がこゝへ來て、主人の兒があまり咳をするので、水を掬んで飲ませようと思つて、其子を土の上におろして待たせて置くうちに、苦しいあまりに子供は水へ落ちて死んでしまつた。それを申譯が無いと、乳母も身を投げて死んだといふのです。それで此池へ來て、小兒の百日咳などの願をかけるとなほるといひながら、やはり多くの人はからかひ半分に、ウバカヒナイと怒鳴つて、泡が立つかどうかを試みたのであります。甲斐ないとは今の言葉で謂へば、だめだなアといふことでありました。

以前は此池の傍には小さい御堂があつて、姥池由來といふ小冊子を印刷にして賣つて居ました。それには乳母は地藏さまに祈願をして、咳になやむ幼兒の身代りに、此池に身を投げた爲に、忽ち其子は全快したなどと人の信心を勸めるやうな話にしてありましたが、それでは姥甲斐無いといふ理由は少しも無いことになるのです。

さうかと思ふと姥は江尻の某といふ者の女房で、非常に嫉妬深くて此池に飛込んで死に、其亡靈が殘つて居るのだとも申しました。可なり古い頃から、其女の死んだのは文祿二年の八月八日だなどと言つたのを見ますと、一時はさう說明した時代もあつたので、つまり何の事だか明瞭とはしなかつたのであります。

越後でも又刈羽郡曾地峠には、オマンが井といふのがあつた。是は主人が虐待をして殺した女房の靈で、傍に立つてオマン〳〵と呼べば、今でもきつと水面に小さな波が起ると謂ひました。上州伊勢崎の附近の阿滿ヶ池なども、水に臨んでアマと呼べば、忽ち其聲に應じて水が湧いたといひました。是と念佛水とは別々のやうにいふ人があるかも知れませぬが、昔の質朴な人々は、誰かゞ死んだとか、怨みが遺つたとかいふ話をすれば、之を聽いて必ず念佛を唱へたのですから、實は一つ話の變化と見てよいのであります。

平左湯うはなりの湯

伊豆の熱海には又平左衛門湯といふのがあつて、三百年も前から評判になつて居ました。是は所謂間歇泉の一つに相違ありませんが、其傍へ來て平左衛門甲斐なしと呼はれば湧き出すと言つて、里の子供が旅人から錢をもらつて、大きな聲でどなつて見せるさうです。しかも何故にカヒナイのかは、誰も書き殘して居りませぬ。

その平左湯の東に、今一つ同じ樣な湧き湯のあるのを清左湯と謂ひました。一名を法齋湯、それを引いて入浴用に使つて居たので、又法齋念佛川とも申しました。法齋をその平左衛門か清左衛門かの號の樣に、考へて居た人もあつたさうですが、法齋念佛といふのは實は一種の踊り念佛のことであります。即ち以前は多分此泉の近くに於て、群衆念佛の會を催す習ひであつて、其拍子につれて水も共々に踊つたのが、後に念佛は中止して話だけが殘つたのであります。

だから茨城縣の水戸の少し北には、人馬がたゞその近くまで近よつただけでも、盛んに水玉の揚がる池もありました。百人一首の「みかの原いづみ川」は爰だと稱し、神樣を祭つてあつて其名をいづみきの森といふ等と、私が通つた時にも敎へてくれた人がありました。

た。豐前の姫島でも七不思議の一つとして、拍子水といふのがありました。人がその側に來て手を打つと、その拍子と共に水が湧くと謂つてをります。但し其泉は鐵分のある赤色の水で、卽ち又此島の姫古曾の神の、おはぐろ用の水だなどと申しました。

別府の溫泉の周圍には、そんな池や泉も段々あるやうです。あれから少し西の方の高原に入つて、田野の千町牟田の朝日長者の屋敷迹といふ邊には、別に又音無し川念佛水などいふのがありました。豐薩軍記といふ書物には人が念佛を唱へると、水もぶつ〳〵と音がすると書いてありますが、若し南無阿彌陀佛より以外の聲を出したら、答へが無かつたかどうかは心許ないものであります。

現にいまから千何百年前の風土記にも、あの地方の山奥に「くべり湯」といふ泉があつて、常は眞黑な泥で塞がつて居り、人が竊かにそば迄やつて來て、出し拔けに大聲を出してわめくと、水が驚いて二丈餘も飛び揚るとありますから、聲よりも寧ろ地面を踏んで動搖させることが、湧きかへる原因になつたらしいのであります。

それならば何故に姥甲斐ないなどと、惡口をいふやうになつたかと申しますと、つまりは信心が稍薄くなつて、人が果して水に靈ありや否やを、試みんとした結果であります。祈願は卽座には效驗のあるものでありませんが、失禮なことをすれば直ぐに誰しも怒りますから、質朴な昔の人たちは斯んなことをして見たものと思はれます。狸寢入りかどうかを知る爲に、わざと批評をして見るのと一つの手段であります。

攝津の有馬の溫泉に、古くからあつたウハナリの湯なども、其の奇拔なる一例であります。中々よくきく湯であつたが、人が水に向つて惡口をすると、急に湧き上る樣子が怒つたやうに見えました。或は後には若い婦人が、美しく化粧をして側へ來ると、忽ち怒沸して止まずなどとまで申しました。ウハナリは古い日本語で第二の女房を意味し、從つて又妬みを意味しました。駿河の姥ケ池の一說にもあつたやうに、單にひやかす以上に女の怒るやうなことをして、惡戲な退屈な人が面白がつたのであります。是は恐らく水の神が本來女性であるといふ考へからかも知れませんが、それが身を投げて死んだ者の靈魂などと

謂ふに至つたのはやはり又念佛の影響であります。何となれば群衆念佛の最初は、人の死靈を慰撫し又送り返すために發明せられたからであります。

一　關の姥さま

東京では淺草の觀音樣の信仰に關係して、又一つの姥ケ池の物語がありました。その池も近くまでは幽かに殘つて居たのが、市區改正の爲にとう〳〵埋められてしまつたのであります。諸國の祖母ケ井乳母ケ池にしば〳〵佛教の奇瑞と女性の生活とを說いて居るのを見ると、是も必ず前申した念佛水の傳說と、何かの因緣のあるといふことだけは、誰にでも考へられるでしようが、私は一歩を進めて其因緣の如何なるものであるかを述べて見たいのであります。

第一には泉と宗教婦人との關係ですが、それは話が是からまだ中々續きます。第二には姥の物語にはよく美しい稚兒を伴うて居ること、それを先づ注意しなければなりません。駿河の姥ケ池でも乳母が主人の兒の咳に惱むのを助けようとして、却つて命を棄てることになつたやうにいつた者がありますが、それが又彼地ばかりではありませんでした。例へば下總印幡沼の西岸に近く、臼井といふ町の古城址の下には、おたつさまと稱する石の小さな祠があつて、此頃までも土地の人々は子供の咳の病の願掛けをして居ました。その理由として利根川圖誌などに述べて居る話は、昔臼井家が敵に攻められて落城したときに、おたつといふ忠義の乳母が主人の若君を抱へて、遁げて沼の葦原の中に隱れて居たところ、折惡く咳が出た爲に發見せられて殺された。その靈魂が玆に殘つて居て、永く同じ病の者を憫んで其難儀を救ふのだと申すのであります。

是は日本の平民の物の考へ方の、如何にもしほらしい一面でありまして、人は自分の苦

んだ經驗を以て、一段と他人に對する同情を增加することの出來るものと、信じて居た結果であります。だから此以外にも路傍の小さい神樣に、折々之とよく似た言ひ傳へはあるのですが、殘念ながら歷史としては承認することが困難であります。

上總の方に行くと是と同じ信仰が幾箇處もあります。其中でも有名な君津郡關村の姥神などは、せきのをば石と名づけて穴のある大石があり、或は關所の礎石では無いかと謂つて居ましたが、そこでもやはり小兒の咳の病の願を掛けてをりました。甲州では中巨摩郡八田のシハブキ婆、是は二貫目ほどの三角な石があつて、其下に行倒れの旅の婆を葬つたと謂ひ、同じく風を引いた子供の親が祈願をしまして、其時の供へ物に必ず炒り胡麻と御茶を上げたのは仔細があらうと思ひます。千葉縣でも俵田の姥神などは甘酒を上げ、臼井のおたつさまでは、麥こがしと御茶とを供へて願掛けをしました。麥こがしと咳とは勿論關係があります。

東京の附近では川越の廣濟寺のシヤブキ婆の塔があつた他に、近い頃までは市內にも幾つかの咳の姥神がありました。一番有名なのは築地の本願寺の近所、稻葉丹後守といふ大名の中屋敷にあつたもの、是は明治になつてから向島の或寺に移され、腰から下の病を治してくれると謂つて、履物などを供へるやうに變化しましたが、以前はやはり御茶と豆炒りあられとを上げて、專ら小兒の咳の病を祈つてをつたのです。

江戸の人はよく色々の評判をしましたが、是にもをかしい話が傳はつて居ます。咳を祈るのは柔和な顏をした老女の石像であつたが、其脇に今一つ大きなこわい顏をした爺の像があり、其の二つは仲が惡くて、竝べて置くと必ず爺の方が倒れると謂つて、少し離して置いてあつたさうです。さうして願掛は婆の方へするのですが、其歸りに爺の石の前へ行つて拜み、今姥どのへ咳の病を直して下さいと賴んで來ましたが、姥どのゝ手際では覺束ないなどゞざる。どうか御心添を願ひますと、嘘をついて還つて來ると、必ず驗があるなどと申しました。即ち双方の仲惡るを利用して、婆樣に負けぬ氣を起させる手であつたらしいのであります。

河臨祭

松浦靜山侯の甲子夜話といふ書物に、行智法印といふ學者のセキノヲバ神に關する詳しい考證が載せてあります。百年前の江戸には前に申した築地稻葉邸以外に、方々に咳の病を禱る老女の石像があつた。其信仰の起原はさして古いもので無く、本來は境を守るから關の姥神と名づけたのを、いつの間にか人が咳の神樣と、解するやうになつたのだといふのは、正しい説であらうかと思ひます。

境の神として日本に古くから有名であつたのは、道祖卽ちサヘノカミであります。或は道のはたの道六神などと謂つて、東部日本では今でも毎年多くは春の初に之を祭り、其祭に參與する者は少年に限つて居ります。佛法の方ではそれを地藏菩薩の垂迹と考へてをり、その地藏も亦小さいもの〻保護者でありました。後世はサヘノカハラは地獄に行く路に在るやうな話が行はれましたが、そこでも此菩薩は境の神であり、又幼き者の救ひ主として拜まれて居ました。サヘといふのも道祖と書くのも共に外部の害敵を遮ぎり防ぐ意味で、卽ちセキの神といふ誤解の由つて來たる所であります。

但し地藏は僧であります故に、早くから男性の單獨の像にして祭りましたが、道祖神の方は男女の二人の神であり、もとは女を主として男を之に配して居たやうであります。現在でも此の男女二神以外に、別に子安と稱して女性ばかりを拜む道の神もあります。水戸の附近などをあるいて見ますと、髮を垂れた上臈の小兒を抱く姿を石に彫刻して、子安さまと謂つて信仰する村が幾らもあります。子安は卽ち子供の安寧を禱るからの古い名前で、主として若い產み盛りの女の團體が協力して其石を建てるのであります。此信仰は自治制であつて、別に導師も無く經典も無いやうであります。從つてその神の根原に關する物語

は忘れられ勝ちであり、後には追々と今風の小説に變化して來たのであります。

淺草觀音の一つ家の石の枕の話なども、既に足利時代の中頃には出來て居りました。性の悪い老婆が騙して旅人を宿泊させて、殺しては財寶を奪ひ取つて居つたのを、或夕暮に觀音は美しい稚兒の姿になつて來て、不思議を示して姥の悪心を濟度なされたといふのは、それより前からあつた奥州の安達ケ原、黒塚の鬼の話の模倣のやうに見えますが、是なども其地に泉があり又奇形の石があり、それに伴うて姥と童子との幽かな言ひ傳へが無かつたら、觀音の御力のみでは此様な縁起は始まらなかつたらうかと思ひます。即ち私等の想像では、爰に近年まであつた姥ケ池の畔にも、最初は駿河の江尻の姥ケ池などとよく似た信仰の記憶があつたのが、一方は念佛水となり此方は石の枕の怖しい話に、分れて成長したものかと思ふのであります。

然らば其記憶とは何であつたかといふと、斯ういふ清い泉の水の岸は、至つて古い頃からの旅の女性の祭を行ふ場所であり、其祭は又普通の人間の親々の、いつの世に於ても最も痛切な願ひ、即ち幼い兒の安全なる成長を禱るのを、目的として居たのであります。是は自由な私の想像で無く、中世の京都の記錄にも、小兒誕生の際には川の邊に出で〻、其子と母との安泰を禱る爲に祭を行つたことが屢々見えて居ります。河臨祭（カハノゾミマツリ）といふのが其名であつて、是は陰陽師の管轄に屬して居ましたが、私は單に大昔からあつた此民族の習慣を、貴族將軍の家々のみは斯んな形式を以て行つたものと思つて居ります。外國から入つた宗教は佛教に限らず、道教でも耶蘇教でも大抵は昔からの仕來りを承認して、たゞ永い年月の間に其説明だけを變へて行くやうにして居ます。さうして人が子の爲に祈願をする習慣の如きは、決して後世になつて外から學ぶやうな性質のものではなかつたのであります。

姥と弘法大師

是まで一向に比較といふことをした人が無かつた爲に、土地だけでは或は歴史の如く、考へて居る人があるかも知れませぬが、清水と御大師様と信心の老女と、三つの物を取合せた昔話が、全國に亘つて何百といふ程も分布して居ります。さうして要點だけは悉く一致して居ります。

最も簡單に通例の型といふのを申しますと、昔一人の行脚僧が來て、水を一杯飲ませてくれと言つた。こゝの水は悪いから御待ちなされと、親切な女が遠方まで汲みに行つて、之を旅僧に勧めた。村では其様に水に不自由をするか、さて〳〵氣の毒やと携へた杖を突立てると、忽ちそこから水が湧いたといひ、或は加持をして清き泉を現出せしめたともいふ。其行脚僧は即ち弘法大師で、つまりは善女の善心が報いられたのだと言つて、今でも其地には珍らしく佳い水があります。

或は相隣する二つの部落で、一方の水が悪く又は不自由な場合には、必ず花咲爺の童話の如く、今一人のよく無い老女が出て來ます。僅かな勞を吝んで水を與へなかつた方では、大師が罰として永久に清水の幸福を奪ひ去つたと言つた、二つの對照を以て一段と傳説の印象を濃厚ならしめて居るのであります。

尤も土地によつては大師の井戸の代りに、石芋を説き又は片身の鮒の話をする處もあります。一方では芋を惜んで此は食へませぬと僞ると、それから後は果して其芋が食へなくなつたと稱して、土地にはクハズイモといふ一種の芋に似た草が繁茂して居り、他の一方では燒きかけて居た鮒を取つて供養すると、大師はそれを水に放し、仍て今に至るまでそこの鮒は片身が焦げて居るなどと謂ふのですが、それも同じ口碑の變化のやうで、大抵は